

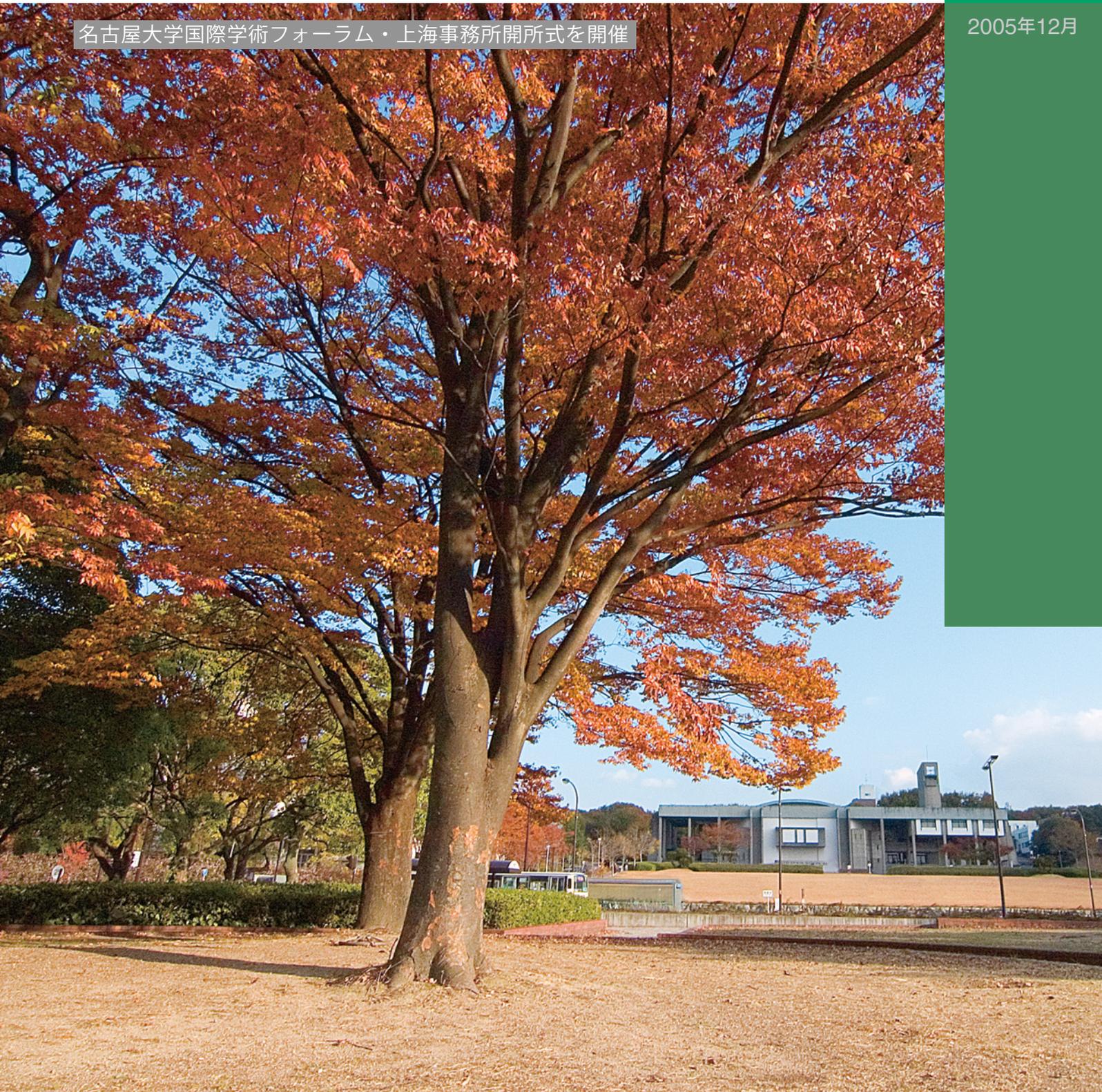
# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.151

2005年12月

名古屋大学国際学術フォーラム・上海事務所開所式を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

●ニュース	
名古屋大学国際学術フォーラムを開催	4
名古屋大学上海事務所を開設	6
上海名古屋大学同窓会（上海支部）設立総会を開催	7
太陽地球環境研究所が中国極地研究所と学術交流協定を締結	7
平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択される	8
平成17年度第2回経営協議会を開催	9
大学院留学生特別コース及び医学系研究科医療行政コース入学式を挙	9
日本数学コンクール表彰式を開催	10
東海地区国立大学合同進学説明会に参加	10
山本理事が日瑞学長会議に出席	11
平成17年秋の叙勲受章者決まる	12
職員創作美術展を開催	12
愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催	12
●オフタイム	
花とともに	13
中西 久枝（大学院国際開発研究科長）	
●知の先端	
東アジアの歴史問題をどう解くか？	14
近藤 孝弘（大学院教育発達科学研究科助教授／高等研究院助教授）	
人間の均質化と資本主義のゆく末	16
越智 和弘（大学院国際言語文化研究科教授）	
●教育のデザインとプラクティス	
平成17年度前期理系教養科目 環境問題と人間—バイオテクノロジーと社会	18
武田 穣（農学国際教育協力研究センター助教授）	
●学生の元気	
外国籍の子どもたちとの関わりの中で訪れた転換	20
中島 葉子（大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士課程後期課程3年）	
●世界につながる	
日独共同大学院—化学教育研究におけるミュンスター大学と名古屋大学の連携—	21
巽 和行（物質科学国際研究センター長）	
●職員から	
国家公務員から大学職員へ	22
荒木 浄子（学務部学務企画課長）	
●部局ニュース	
第1回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催	23
日独ワークショップ「バイオニクスと自然に学ぶ技術」を開催	23
テクノ・フェア名大'2005'を開催	24
故長澤瑞穂君を送る会を開催	25
医学部解剖吊慰祭を挙	25
医学部保健学科が市民公開講座を開催	25
農業教育公園・講演会（第2回）を開催	26
真鍋淑郎先生特別講演会を開催	26
アジア学術セミナー「プレート沈み込み帯における巨大地震」を開催	26
国際開発研究科が国内実地研修現地報告会を開催	27
セミナー「グローバルに仕事をするととは？」を開催	27
附属図書館が2005年秋季特別展を開催	28
農学国際教育協力研究センターが日米大学間対話セミナーを開催	29
ICCAE2005年度第4回オープンセミナーを開催	30
メダカ生物遺伝資源の標準化に関する国際シンポジウムを開催	30
愛・地球博ポーランド館の岩塩標本が博物館に寄贈される	30
博物館が『奈良坂源一郎 蟲魚圖譜』の出版と原画の一般公開を行う	31
●新任部局長等の紹介	32
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年10月16日～11月15日	32
●イベントカレンダー	35
●ちょっと名大史	
愛知医専・愛知病院正門遺構	36

# 名古屋大学国際学術フォーラム・ 上海事務所開所式を開催





本学は、11月11日（金）、中国・上海市において、名古屋大学国際学術フォーラム（国際学術論壇）を開催するとともに、名古屋大学上海事務所を開設しました。また、名古屋大学全学同窓会の海外支部としては3番目となる上海名古屋同窓会（上海支部）の設立総会が開催されたほか、太陽地球環境研究所と中国極地研究所との間で学術交流協定も締結されました。

本学は、学術憲章において、「世界屈指の知的成果の創出」とともに、「人間性豊かな勇気ある知識人の育成」を基礎目標として掲げ、これらの理念に基づき、教育・研究活動を展開し、国際交流に努めているところであり、その一環として、本学と中国の学術交流協定大学・機関との連携を基礎に、更なる国際学術交流等の推進を目指して、名古屋大学国際学術フォーラムをはじめとする今回の行事を開催しました。



10:00～	名古屋大学上海事務所開所式 (於：名古屋大学上海事務所)
11:15～	太陽地球環境研究所と中国極地研究所との学術交流協定調印式 (於：上海新錦江大酒店)
13:00～	名古屋大学国際学術フォーラム (於：上海新錦江大酒店)
18:00～	上海名古屋大学同窓会（上海支部）設立総会 (於：上海花園飯店)
18:30～	懇親会 (於：上海花園飯店)

1	2	3
		4
		5

- 1 上海新錦江大酒店  
(名古屋大学国際学術フォーラム会場)
- 2 記念講演
- 3 あいさつする平野総長
- 4 祝辞を述べる李永盛同済大学副学長
- 5 祝辞を述べる姜標中国科学院上海有機化学研究所所長

## 名古屋大学国際学術フォーラムを開催



6 | 7

6 パネル・ディスカッション

7 記念講演を行う中村2005年日本国際博覧会協会事務総長

名古屋大学国際学術フォーラム（国際学術論壇）が、11月11日（金）午後1時から、上海新錦江大酒店において、復旦大学、上海交通大学、同济大学及び中国科学院上海有機化学研究所の後援を得て開催されました。

このフォーラムは、本学と中国の学術交流協定校との連携を基礎に、21世紀の国際学術交流の目指すべき方向について考え、併せて本学の先端研究を紹介し、中国の研究機関との一層の交流強化を図ることを目的として、海外で初めて開催されたもので、各大学・機関の研究者、学生（復旦大学40名、上海交通大学70名、同济大学100名、華東師範大学50名）、本学教職員など、約350名の参加がありました。

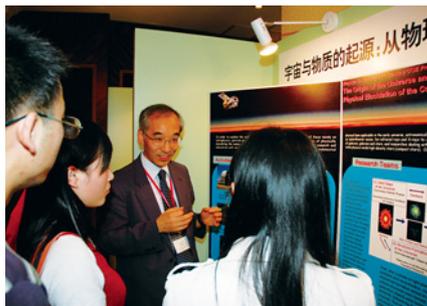
フォーラムは、日本語・中国語の同時通訳付きで、岡本総長補佐（国際学術フォーラム実行委員会委員長）の司会進行により行われ、初めに、平野総長から開会のあいさつがあった後、李永盛（Li Yong sheng）同济大学副学長及び姜標（Jiang Biao）中国科学院上海有機化学研究所所長から祝辞が述べられました。

続いて行われた講演会では、山本理事による本学の先端

研究と国際学術交流の概要説明の後、本学21世紀 COE プログラム「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」の拠点リーダーである三矢保永工学研究科教授が、同プログラムについて、久世雅樹物質科学国際研究センター助手が、磯部 稔生命農学研究科教授をリーダーとするアジア研究教育拠点事業「アジアの最先端有機化学」について、藤井太陽地球環境研究所長が、太陽地球系科学における国際共同観測研究について講演を行いました。

講演会の後半には、本学卒業生の中村利雄2005年日本国際博覧会協会事務総長による「愛・地球博の意義、成果と今後の万博について」と題する記念講演が行われ、2010年万博開催予定地の上海市の関係者等から環境問題などについて質問がありました。

最後に、山本理事をコーディネーターとして、「21世紀の国際学術交流」をテーマに、パネル・ディスカッションが行われ、パネリストとして参加した平野総長と、上海にある学術交流協定大学・機関である復旦大学の王生洪（Wang Sheng hong）学長、上海交通大学の謝繩武（Xie Sheng wu）学長、同济大学の李永盛副学長、中国科学院



8	9	10
11	12	13
	14	
		15

- 8 説明する山本理事
- 9 講演する久世物質科学国際研究センター助手
- 10 講演する藤井太陽地球環境研究所長
- 11 講演する三矢工学研究科教授
- 12 「青色発光デバイスは如何に創られたか」
- 13 「ノーベル賞への道」
- 14 21世紀 COE プログラムの展示ブース
- 15 懇親会

上海有機化学研究所の姜標所長から、21世紀の国際学术交流の在り方について貴重な意見が出されました。

また、午前11時から開設された国際学术交流ブースでは、「名古屋大学の紹介」、野依良治、赤崎 勇両特別教授の研究業績等を紹介した「ノーベル賞への道」、「青色発光デバイスは如何に創られたか」、ライフサイエンス、情報通信、環境、ナノテクノロジー・材料及び基礎分野を広くカバーした本学の21世紀 COE プログラム13拠点の概要が展示されました。ブースでは、講演会の途中に45分間の見学時間を特別に設けたこともあり、担当の研究者等に熱心に質問をする学生の姿が多く見られました。

このフォーラムは、講演会・展示ともに大変な盛り上がりを見せ、本学のプレゼンスを十分に示すことができました。なお、懇親会が、午後6時30分から、上海花園飯店ジャスミンの間において行われ、平野総長、謝上海交通大学学長及び唐駿（Tang Jun）全学同窓会上海支部会長のあいさつの後、山下理事の発声で乾杯し、交流が深められました。



# 名古屋大学上海事務所を開設

名古屋大学上海事務所が、11月11日（金）、本学初の全学的海外拠点として、上海市内に開設され、同日午前10時から、開所式が行われました。

上海事務所は、中国の高等教育・研究機関等との学術交流の推進や、中国における本学の広報、海外同窓会の中国における連絡窓口等を目的として開設されたもので、中国との今後の交流にさらに弾みがつくものと期待されています。

開所式には、本学から、平野総長、山下理事、山本理事、早川総長補佐等、中国側からは、謝繩武（Xie Sheng wu）上海交通大学学長をはじめ、同大学、復旦大学、同済大学等の大学・学術研究機関関係者など、約30名が出席しました。

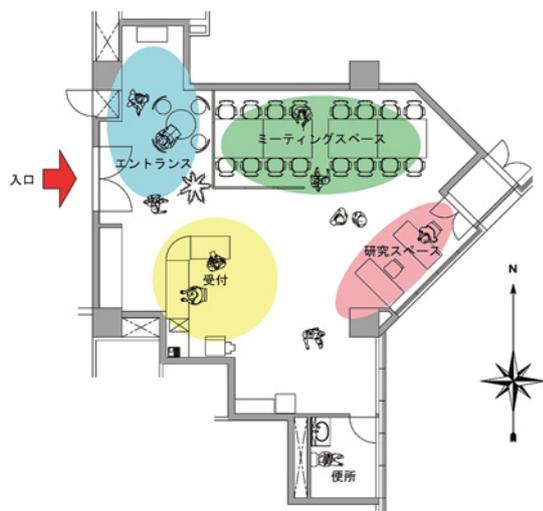
開所式では、上海事務所の看板除幕及び記念撮影が行われた後、平野総長から、「本学は中国の32の大学・機関と学術交流協定を結んで国際学術交流を推進しており、特に留学生交流においては、本学の留学生のうち中国からの留学生が約4割を占め、その中核を構成している。今後も中国との国際交流をより一層推進していきたい。」とあいさつがありました。



看板除幕後、握手を交わす謝上海交通大学学長（左）と平野総長（右）

続いて、謝上海交通大学学長から、「これまでの名古屋大学と上海交通大学との学術交流を高く評価し、上海事務所が上海交通大学に隣接する建物内に開設されたことを歓迎するとともに、今後も名古屋大学が上海交通大学を含めた中国国内の各機関と活発な学術交流活動を展開していくことを期待したい。」とお祝いのことばがありました。

その後、上海事務所長である山本理事の発声で乾杯が行われ、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。



上海事務所平面図

- ◆所在地 上海市徐汇区淮海西路55号 申通信息広場27階 D 座  
(Sun Tong Infoport Plaza 27D, 55 Huaihai West Road, Shanghai)
- ◆電話・FAX +86-21-6280-6185
- ◆職員 所長：名古屋大学副総長 山本 進一  
幹事：上海交通大学教授 楊 立  
復旦大学教授 梁 栄 慶  
同済大学教授 王 徳  
中国科学院上海有機化学研究所所長外事助理  
劉 菲  
事務所駐在連絡員： 姚 綺

## 上海名古屋大学同窓会（上海支部）設立総会を開催

名古屋大学全学同窓会の海外支部としては、韓国支部、バングラデシュ支部に次いで3番目となる上海名古屋大学同窓会（上海支部）の設立総会が、11月11日（金）午後6時から、上海花園飯店リリーの間に開催されました。

総会は、平野総長、山下理事、伊藤附属図書館長（全学同窓会代表幹事）や、上海在住の同窓生など約30名の出席のもと、初めに、平野総長から、「現在、本学で学んでいる留学生の4割が中国からの留学生です。本学としても、今後、留学生の受入環境の充実等を図るとともに、卒業生との交流を図っていききたいと思います。上海支部が、卒業生の精神的な支えになっていただけることを大いに期待しています。」とあいさつがありました。その後、全学同窓会を代表して、伊藤代表幹事からあいさつがあった後、上海支部の設立までの経緯及び同支部の会長・幹事の報告が行われました。

続いて、平野総長から、同支部会長の唐駿（Tang Jun）シャンダ・ネットワークCEO（1988年大学院工学研究科修了）に、認定証と支部旗が授与され、最後に、唐会



平野総長から支部旗を授与される唐駿上海支部会長

長からあいさつがありました。

上海支部では、名古屋大学上海事務所を活動の拠点として、中国における同窓生のネットワークを拡げていくことにしています。

## 太陽地球環境研究所が中国極地研究所と学術交流協定を締結



学術交流協定締結後、握手を交わす秦為稼（Qin Weijia）中国極地研究所副所長（左）と藤井太陽地球環境研究所長（右）

太陽地球環境研究所は、11月11日（金）、上海新錦江大酒店において、中国極地研究所と学術交流協定を締結しました。

中国極地研究所は、1989年中国海洋局の下に創設され、極域に関する科学の研究、中国南極地域・北極地域観測隊への輸送・設営の支援等を行っています。

中国極地研究所と太陽地球環境研究所は、2002年から、特に、欧州非干渉散乱（EISCAT）レーダー観測やSuperDARN（極域HFレーダーネットワーク観測）に関する教育・研究面での協力関係を強化してきたところで、今回の締結により、EISCATやSuperDARNの推進のみならず、両国及びアジアの当該分野の発展に大きな貢献をするものと期待されています。

## 平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択される －本学は人社系3件、理工農系1件の計4件採択－

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブの審査結果が、10月25日（火）、公表され、本学が応募した下記プログラム4件（人社系3件、理工農系1件）が採択されました。

今後の大学院は、①大学院教育の実質化（教育の課程の組織的展開の強化）、②国際的な通用性・信頼性の向上を通じ、世界規模での競争力の強化を図ることを重要な視点として、教育研究機能の強化を推進していくことが求められています。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、「新時代の大学院教育」（平成17年6月13日中央教育審議会中間報告）の提言を踏まえて、今年度から実施される事業で、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な研究者養成に関する教育取組に対し、重点的な支援

を行うことにより、大学院教育の実質化を推進することを目的とするものです。

今年度は、国公私立大学大学院における研究者養成を目的とした博士課程（一貫制、区分制、後期3年の課程のみの博士課程）を置く専攻の教育の課程で実施している教育取組を基にした、今後の研究者養成に関する新たな教育プログラムを対象として、人社系・理工農系・医療系の学問分野で募集があり、国公私立大学から338件の申請がありました。選考は、独立行政法人日本学術振興会を中心に運営される「魅力ある大学院教育イニシアティブ委員会」（委員長：石 弘光中央大学総合政策学部特任教授）で行われ、審査の結果、本学が中心となり応募した教育プログラムを含めて97件（人社系35件、理工農系43件、医療系19件）が採択されました。

### 平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ採択一覧

研究科名	専攻名	教育プログラムの名称	申請分野	取組実施（担当者責任者）	
				職名	氏名
大学院教育発達科学研究科	心理発達科学専攻	チーム参加型プログラムによる教育の体系化	人社系	教授	吉田 俊和
大学院法学研究科	総合法政専攻	発信型研究者養成を目指す法学・政治学教育（知の多層的ネットワークの活用）	人社系	教授（専攻長）	石井 三記
大学院国際開発研究科	国際開発専攻・国際協力専攻	国際開発分野における自立的研究能力の育成（フィールドワーク能力強化を中心に）	人社系	教授（専攻長）	廣里 恭史
大学院生命農学研究科	生命技術科学専攻	官学連携による生命技術科学教育の推進	理工農系	教授（専攻長）	柘植 尚志

## 平成17年度第2回経営協議会を開催

平成17年度第2回経営協議会が、11月20日（日）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、最初に、平野総長からあいさつがあった後、各担当理事から、平成16年度決算報告、平成16年度に係る業務の実績に関する評価結果、経営状況の報告、財政計画骨子（案）、早期退職制度、職員給与規程の一部改正等



経営協議会の様子

について説明が行われ、審議の結果、了承されました。

続いて、本学における大学教育改革支援プログラム（教育GP等）の採択状況、今年度の施設整備状況、アスベスト対策の現状、名古屋大学上海事務所について、担当理事から説明が行われました。

外部委員からは、各議題について、大所高所から貴重な意見が多数寄せられました。

なお、今年度は、来年2月と3月に開催を予定しています。

## 大学院留学生特別コース及び医学系研究科医療行政コース入学式を挙行

大学院法学研究科、工学研究科、環境学研究科留学生特別コース及び医学系研究科医療行政コース入学式が、10月19日（水）、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

大学院留学生特別コースは、開発途上国等でニーズの高い分野において、短期間に学位を取得したいという要望に応えて、日本語を用いず、英語による研究指導を行うコー

スで、留学生の大半は、大学推薦による国費留学生で占められています。また、大学院医学系研究科医療行政コースは、開発途上国の次世代を担う行政官（ヤングリーダー）で、原則経験年数5年程度以上の40歳までの方を日本に招き、1年間の英語による教育で修士学位を与えるコースです。今年度は、大学院法学研究科7名、大学院工学研究科5名、大学院環境学研究科3名、大学院医学系研究科16名の計31名が本学で学ぶことになりました。

式典は、全て英語で行われ、総長をはじめ理事、監事及び研究科長の列席のもと、名古屋大学交響楽団による奏楽で始まり、入学生紹介、総長の辞、役職員等の紹介に続き、大学院環境学研究科のCHEN BING（チェンビン）さん（中華人民共和国）が入学生総代として宣誓を行いました。

閉会後には、列席者、陪席の指導教員等を交えて記念撮影が行われ、入学生は、これからの学生生活に期待を膨らませていました。



入学生総代として宣誓を行うCHEN BINGさん

## 日本数学コンクール表彰式を開催

平成17年度日本数学コンクール表彰式が、11月3日(木)、シンポジオンホールにおいて、受賞者とその父兄等約100名が参加して行われました。

名古屋大学交響楽団のホルン演奏ではじまった表彰式では、日本数学コンクール委員会会長の山下理事及び山田知子愛知県教育委員会指導主事からあいさつがあった後、



山下会長から賞状等を受け取る受賞者

山下会長から、日本数学コンクール、日本ジュニア数学コンクール及び数学コンクール論文賞で優秀な成績を修めた受賞者に対し、賞状、記念の楯、副賞等が授与されました。続いて、大賞及び論文賞金賞を受賞した高校生が、受賞の喜びとともに、コンクールを受ける立場から出題する方になりたいとの力強い抱負を述べるなど、コンクールとは違い、終始和やかな表彰式となりました。

表彰式終了後には、恒例の「問題解説」がシニア・ジュニアに分けて実施され、出題した先生から、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方が説明されました。また、問題を解く中でユニークな発想から生まれた解答を引き出した例等の解説もあり、参加した中・高生と父兄等は熱心にメモを取りながら聞いていました。

## 東海地区国立大学合同進学説明会に参加

東海地区国立大学合同進学説明会が、10月16日(日)、河合塾千種校において開催され、本学もこれに参加しました。

この説明会は、愛知、岐阜、三重、静岡の東海4県にある国立8大学(名古屋、名古屋工業、愛知教育、豊橋技術科学、岐阜、三重、静岡、浜松医科)が合同で初めて開催



個別相談の様子

したもので、当日は、580名余りの受験生・高校生等が集まり、終日活気にあふれていました。

説明会では、基調講演、各大学20分から30分程度の大学説明及び個別相談が行われ、受験生・高校生等は皆真剣に聞き入っていました。本学は、入試課職員による学部紹介、入学者選抜等についての大学説明及び個別相談を行い、特に、個別相談は、熱心に質問したり、メモを取ったりする参加者の姿が見られるなど好評でした。

## 山本理事が日瑞学長会議に出席



日瑞学長会議（於：Linné Hall）

山本理事は、10月18日（火）、19日（水）にスウェーデン・ストックホルムで開催された日瑞学長会議に、平野総長の代理として出席しました。

両国間の高等教育研究分野における学術交流を促進するため、平成15年10月にスウェーデンの大学長等一行が訪日し、日本の大学長等と主に大学改革に関する意見交換を行いました。今回の会議は、その返礼として、スウェーデン側が日本の大学長等を招待したことにより実現したもので、日本側からは、本学のほか、国立大学法人10校、公立大学3校、私立大学3校の学長又は副学長（理事）と小野元之日本学術振興会理事長が参加しました。

初日は、スウェーデン王立科学アカデミーで開催され、ノーベル賞の決定・発表の場となっている Linné Hall において、Bo Sundqvist ウプサラ大学長・スウェーデン高等教育協会会長から開会のあいさつがあった後、会場を移してセミナーが行われました。セミナーでは、スウェーデン側から、Jan Lindsten 王立科学アカデミー長、Bo Sundqvist 氏等が、同国における大学・高等教育機関の財

政発展、研究資金調達、研究・高等教育に対する政府資金等について、日本側から、相澤益男東京工業大学長・国立大学協会会長が、日本における大学事情及び将来の展望についてプレゼンテーションを行いました。午後は、大学・研究機関・産業の関係、大学内での戦略計画等をテーマにパネルディスカッションが行われ、2日目には、スウェーデン王立工科大学において、本会議が開催されました。

午後は、北欧最大の医学大学であるカロリンスカ研究所を訪問し、卓抜した研究成果等について説明を受け、10月20日（木）には、大学院法学研究科と部局間学術交流協定を締結しているルンド大学を訪問し、ナノサイエンス分野における先駆的教育プログラムについて紹介された後、生物医学センター（BMC）等を視察しました。また、10月21日（金）には、ウプサラ大学で開催された欧州大学協会会議（EUA）に陪席し、欧州大学学長等による研究戦略についての討論を傍聴する機会に恵まれるなど、有意義な訪問となりました。



日瑞学長会議・セミナーの様子

## 平成17年秋の叙勲受章者決まる

－ 本学関係者5名が喜びの受章 －

平成17年秋の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

瑞宝中綬章

長島 一男 名誉教授（理学部）

瑞宝中綬章

河合 望 名誉教授（工学部）

瑞宝中綬章

渡邊 鏝 名誉教授（工学部）

瑞宝単光章

高橋 朝代 元医学部附属病院看護部看護師長

瑞宝中綬章

丹生 潔 名誉教授（理学部）

## 職員創作美術展を開催



作品を鑑賞する職員

平成17年度名古屋大学職員創作美術展が、10月18日（火）から10月21日（金）までの4日間、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この美術展は、職員自ら創作活動を楽しみ、美術作品等の鑑賞を奨励するとともに、潤いのある情操豊かな生活、余暇の一層充実した活用を促し、生活に根ざした文化の普及・高揚に資することを目的として開催されているもので、今年度で14回目です。今回は、絵画、絵手紙、陶芸、写真、書道、彫刻及び手工芸と幅広く、多くの力作が展示され、鑑賞に訪れた延べ250名の職員等は、芸術の秋を満喫していました。

## 愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーを開催



熱心に講演を聞く参加者

平成17年度愛知地区国立大学法人等退職準備セミナーが、10月28日（金）、シンポジオンホールにおいて、愛知教育大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、豊田工業高等専門学校及び自然科学研究機構岡崎地区の5機関と本学との共催により開催され、平成21年度までの定年等退職予定者とその配偶者合わせて154名の参加がありました。

セミナーでは、木村好男住友信託銀行財務コンサルタントから、「これからの経済生活設計」と題し、退職後の資産管理のあり方について、押田芳治総合保健体育科学センター教授から、「定年後の健康管理と健康増進」と題し、生活習慣病予防のための運動療法について講演がありました。また、事務担当者による退職後の医療制度、退職手当、退職共済年金、雇用保険等の説明があり、参加者は熱心に聞いていました。

花とともに

大学院国際開発研究科長  
中西 久枝



園芸店にて

毎年今頃の季節になると、わくわくして園芸店に通うようになります。お目当ての花は、シクラメンとパンジーです。10月下旬から11月中旬にかけて、さまざまな色や形をしたパンジー、ビオラ、シクラメンの苗が次々と店頭と並びます。昨日見つけたのは、ボジョレヌーボーというパンジー。名前のとおり赤ワイン色で、秋らしい風合いの花でした。私がシクラメンとパンジーが好きなのは、いずれも咲いている期間が長いこと、それから多年草で翌年も咲くからです。両方とも寒さにめげず冬を越すのが魅力です。

苗で植えるとパンジーもシクラメンも11月から翌年5月まで、1年のうち7ヶ月も咲いています。私のガーデンシクラメンは6月まで咲いているときさえありますが、そうするとさすがに季節はずれな感じです。最近温暖化のせい、ジャスミンの花が8月に咲き終わったと思ったら、10月の上旬に再び咲き始めました。最近の小春日和で季節を間違ったようです。ジャスミンの香りは眠り

を誘うので、部屋いっぱいに漂うと本当に眠くなり、リラックス効果は抜群です。

シクラメンもパンジーも花が出ない夏のあいだは、バラが活躍してくれます。バラは本来虫がつきやすく手間がかかる花ですが、私のツルバラはあまり病気もせず3月から12月のあいだ何回も花が咲きます。パンジーやシクラメン同様、手がかからない「子」で助かっています。植物を「子」と呼ぶのは、私が通う園芸店のヨウコさんの口癖です。どんな植物が強いか、どう育てればいいのか相談すると、「この子は寒さにも平気だからお勧め」「あの子は水をたくさんあげていれば大丈夫」などと言います。植物といえども愛情をかけて育てるべしということのようです。私は水も肥料も決してやりすぎないようにし、あとは放ったらかしです。まさにずぼらで手抜きの園芸ですが、毎日「子供たち」に声をかけています。話しかけることこそがガーデニングの秘訣だと思い楽しんでいきます。



今が旬のボジョレヌーボー



シクラメン

# 東アジアの歴史問題をどう解くか？

近藤 孝弘 大学院教育発達科学研究科助教授／高等研究院助教授

いま北京の清華大学で、私はこの文章を書いています。

10月26-27日の両日、清華大学と国際教科書研究所（韓国）の共催で国際歴史教科書会議が開かれ、日中韓はもちろん、ドイツ・ロシア・イスラエルの歴史家も参加して、東アジアの歴史問題について意見を交わしました。

議論の中心になったのは、当然のことながら、いわゆる靖国問題や「つくる会教科書」問題に揺れる日本人の歴史認識ですが、中国の複数の歴史家から、自分たちの歴史教育も同様の問題を抱えており、日本の批判をするよりも、まずは自分たち自身に目を向けるべきだとの意見が出されたのが印象的でした。また、韓国の歴史家からは、2002年に開始された日韓歴史共同研究委員会をはじめとする、近年両国間で発展を見せている研究協力を評価し、それに期待する声も聞かれました。

もし、この会議の参加者が各国で教育文化行政

を担うことがあれば、過去数十年にわたって東アジアの私たちを悩ませてきた歴史問題は、少なくとも外交問題としてはたちどころに解決されるかもしれません。

しかしながら、残念なことに、そういう日が近々やってくるとは考えられないのが現状です。それは、まさに外交と内政がリンクしているところに原因があります。日本だけでなく、中国にも韓国にも歴史教育をめぐる様々な立場と対立があり、さらにそれらが国境を越えて複雑に結びつき、刺激しあっています。たとえば一国でナショナリストティックな勢力がプレゼンスを高めれば、それに対抗する形で隣国でも同様の現象が起こりがちです。そういうとき、清華大学で聞かれたような声は、少数の良識派の意見にすぎないとして、現実の政治から排除されやすくなります。

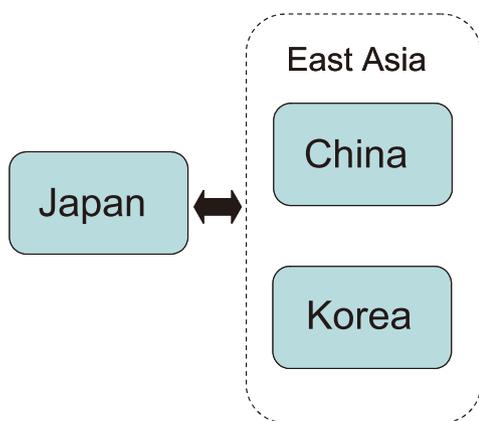
こうした現状認識に立って、高等研究院での研究プロジェクト「東アジアにおける国際協調的歴史教育システムの構築に関する政治教育学的研究」は、日中韓はもちろんのこと、ドイツ・アメリカの研究者も参加して、歴史認識をめぐる議論を悪循環から救い出し、東アジアに協力的・協調的な関係を促す広義の歴史教育を実現する可能性を模索しています。

強調したいのは、このプロジェクトは、近代の日中韓関係性についての共同研究を進めるものでも、共通の歴史教材の制作を目指すものでもないということです。そのような試みはこれまでも行われており、すでに一定の成果をあげています。しかしながら、それにもかかわらず歴史問題は解決されていないのであり、こうした現実を踏まえて本研究プロジェクトは、歴史教育を外交と内政



図1 清華大学で行なわれた国際歴史教科書会議。報告しているのは、韓国・国際教科書研究所所長の李泰永氏

## Japan-centered Perspective



## East Asian Perspective

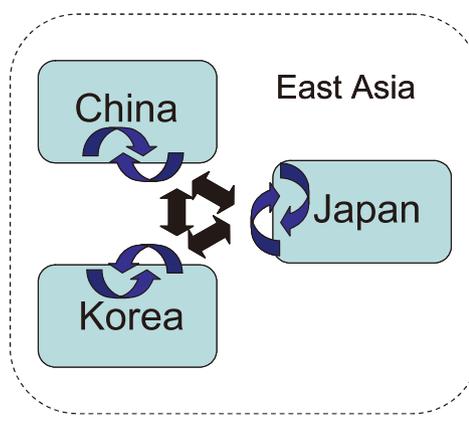


図2 歴史問題へのパラダイム転換

におよぶ政策領域として捉え、つまり政治教育学的に問題にアプローチしようとするものです。これは歴史（教育）学と外交論の並立状況から総合的な歴史政策論へのパースペクティブの転換と言って良いでしょう。

ここでは、もはや歴史認識をめぐる紛争は「日本問題」ではありません。日本の近代史における隣国への侵略の事実が重要な意味を持つことは言うまでもなく、紛争解決の最重要の鍵を握るのが私たちであることは確かですが、その問題は日本だけのものではないのです。近代史における日本との関係をどう捉えるかは、中国・韓国においても重要な政治的問題・論争点であり、それは同時に東アジア全体にとっての課題に他なりません。

最後に、清華大学において、ほぼ全ての参加者が、問題解決には長い時間を要するだろうが、すでに一定の前進は見られると述べていたことを確認したいと思います。このプロジェクトは、歴史政策や政治教育といった観点を導入し、また日本中心アプローチから東アジア・アプローチへのパラダイム転換により、新たな一歩を踏み出そうとするものです。

1963年生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了、博士（教育学）。東京学芸大学海外子女教育センター専任講師を経て、1996年より名古屋大学大学院教育発達科学研究科（教育学部）助教授。2005年より高等研究院助教授を兼任。その間、1998-99年に日本学術振興会特定国派遣研究員としてウィーン大学に、また2003-04年にアレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究員としてポツダム大学に留学。主な受賞に、日本比較教育学会賞（大賞）、東畑賞。ひとこと：最近、日本以外のアジア諸国を旅する機会が増えていますが、やはりドイツにしていると落ち着きます。アジア人であるためには、相当の努力が必要なようです。

こんどう たかひろ



## 人間の均質化と資本主義のゆく末

越智 和弘 大学院国際言語文化研究科教授

資本主義が機能するために必要な真の拠り所が、西洋が快楽の在処として伝統的に規定してきた女性的性格を、近代にいたって完璧なまでに消去しえたこと、つまり、男性的言語（ロゴス）によって隔々にいたるまで規定し尽くされた世界を実現しえたことにある事実を、芸術文化の側面から論証することが、今年上梓した拙著『女性を消去する文化』（鳥影社刊）の骨子をなしています。こうした、いまだ多くにとっては意外な、あるいは敢えて認めたがらない世界の真実を浮き彫りにするうえで、またとない水先案内役を果たしてくれたのが、ここにその一端を紹介する草間彌生らをはじめとする、20世紀後半期に出現した女性たちのアートなのです。

破壊と自己破滅を前提にすべてを貪欲に商品価値へと転換する資本主義のゆく末と、それに日々避けがたく呑み込まれつつある非西洋に位置する日本の将来への不安に駆られるなかで、世界の姿とは、一般に思いこまれがちなように男女に不平等に分配されたパイなどではなく、すでに完璧なまでに男性的に完成したアリーナとして理解すべきものであり、西洋人に限られることなく、もはや地球上の大半の人間はそこから逃れる術もない厳しい現実気づかせてくれたのが、1970年代以降の意識に目覚めた西洋の女たちの果敢な行動だったのです。

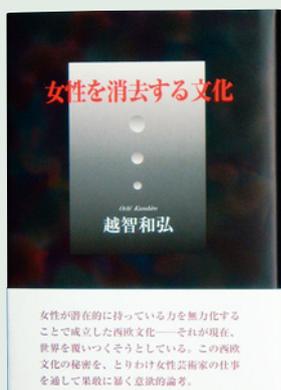
こうした現状認識がしだいにコンセンサスを得ることは、もはや時間の問題かと思われませんが、そうなると、そんなことは昔からわかっていたといわんばかりのふりをする面々が現れてくることが予想されます。しかし、歴史的事実は決してそうではなかったことを踏まえておくことが、潔い姿勢ではないかと思われれます。つまり、いまこう

なっているという現状から物事をはじめめるのではなく、そうした現状は、いつどこで生まれ、どういう変遷をたどって今に至ったかという歴史認識を踏まえた姿勢こそが、思考をするうえで欠かせないと思われれますが、これはどうやらわれわれがもっとも苦手とすることのようです。

丸山真男は、日本人には自己を歴史的な関連の中で位置づけることを不得意とする、基本的な欠陥があることを指摘していますが、本書を上梓したのちに返ってきたいくつかのやや早とちりな批判、すなわち「女性を消去するとはどういうこと



草間彌生『ドレッシング・テーブル』(1990)



『女性を消去する文化』（鳥影社刊）

か。この男女平等の時代に、なんということを手張するのか」といったお叱りを受けてまず感じるのはこの点です。われわれはとかく安易に「いまは～の時代だから…」という表現によってなんとなく納得し、こうした歴史的因果関係を欠いた前提のもとに行動してしまう傾向があります。

これは、外国文化を受容し模倣することを旨に成立してきた日本文化の宿命的な現実と、おそらく関連しているのでしょう。かつて第2次大戦中に日本軍の捕虜となった体験をもとに『猿の惑星』というSF小説を書いたフランス人作家ピエール・ブールは、作品の中で、高度に発展した模倣文化のなかで捕らわれた主人公に、「はたして知性のない生物が模倣という単純なパターンだけで文明を永続させることは可能だろうか?」と思案させています。もちろんわれわれに知性がないなどというつもりは毛頭ありません。しかし、ここで知性とされているものを、何かの模倣ではない無からものを生み出す創造力に置き換えてみると、『戦場にかける橋』の作者でもある西洋人ブールが日

本という文化に遭遇して発した問いに、幾ばくかの真実味がこもることを認めざるをえなくなります。

西洋の製品がすでに多く、生産コストの安い非西洋地域で生産されていることや、日本の経営方式を西洋の企業が取り入れる例があることなどは、いずれの場合もその歴史的ルーツが西洋にある限り、なんら劇的な変化を意味してはいません。それは資本主義というゲームが行われるスタジアムに、白人男性以外のプレーヤーが参入してきた事実を示しているにすぎないからです。いずれにしても、そこでプレイするためのルールは、すでに白人男性によってすべて決定済みであるため、社会進出を果たす女性にしても、西洋と互角に張り合おうとする日本企業にしても、まずは西洋的な規範や価値観といった基本ルールを自分のものとして身につくまで学び（まねび）、西洋をモデルとする均質化（homologation）を経る道によってしか、グローバル化というゲームへの参入が許されないのが、けっして愉快ではない世界の現実だといえます。

こうして完成した世界の内実はどういったものなのでしょう。拙著においては、そこに西洋以外のいかなる文化にもみられない秘密があること、すなわち女性＝快楽を敵視するキリスト教的禁欲の強化を核として資本主義が成立しえたことまでが明らかにされています。そしてもうひとつ。それは、西洋的規範の模倣をいやおうなく強制される側に位置するわれわれの文化にとって、未来はいかなる可能性が考えられるのか、という問題提起です。願わくば後の世代が、『猿の惑星』を読んでドキッとするような社会にだけはなっほしくないのです。

1951年 神奈川県横須賀市生まれ  
 1974年 東京外国語大学外国語学部卒業  
 1978年 東京外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了  
 1978年 大同工業大学外国語教室講師  
 1980年 名古屋市立大学教養部講師  
 1984年 名古屋市立大学教養部助教授  
 1988年 名古屋大学総合言語センター地域言語文化部助教授  
 1991年 名古屋大学言語文化部比較言語文化系助教授  
 1996年 名古屋大学言語文化部比較言語文化系教授  
 1998年 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授  
 2005年 名古屋大学大学院国際言語文化研究科、博士号取得  
 研究領域：資本主義、ロマン主義、キリスト教をめぐるドイツ文学、比較文化論  
 好きな言葉：北極探検家 R・E・ピアリーの “In life I'll find a way, or I'll make one.”

おち かずひろ



# 平成17年度前期理系教養科目 環境問題と人間—バイオテクノロジーと社会

武田 穰 農学国際教育協力研究センター助教授

私は、平成17年度前期に共通教育科目の一つとして、「環境問題と人間—バイオテクノロジーと社会」を担当した。幸いにも、学生アンケート等で好評を博し、グッドプラクティス報告にも選定された。ここでは、本講義の内容について解説する。

## 1、講義に対する考え方と講義の目標

私は、「環境問題と人間」科目の一部を、定年退職した教員と分担する形で3年間実施してきた。その際、学生が一面的な知識しか持たず、批判的な態度で自ら考える習慣がないことに気づき、複数の観点から見た考え方を伝えるようにしてきた。アンケート・レポート等からも、その効果が少しあることが明らかになっていた。

本年度の担当を依頼された時点で、こうした考え方で一貫した講義を行いたいと考え、15回の講義を一人で行うことを選択した。本年度は、「環境問題と人間」に限定せず、科学技術（私がある程度専門的に関与できるバイオテクノロジーの範囲で）が関連する社会的問題を取り上げることとした。特に、具体的事例を挙げて、考える材料を与えることに重点を置いた。

受講生は、理系の学部一年生が大部分であった。最初の講義で述べたことであるが、あなたのお母さんが、「ダイズイソフラボンが若返りに効果があるって本当？」と聞かれた時に、ある程度専門的知識を持つ者としてどのように答えるか、どのように調べるのかということを理解することを講義の目標とした。

## 2、講義内容

シラバスを表1に示した。各回の講義で取り上げたトピックはさまざまであるが、何らかの形で、

表1 環境問題と人間 平成17年度シラバス

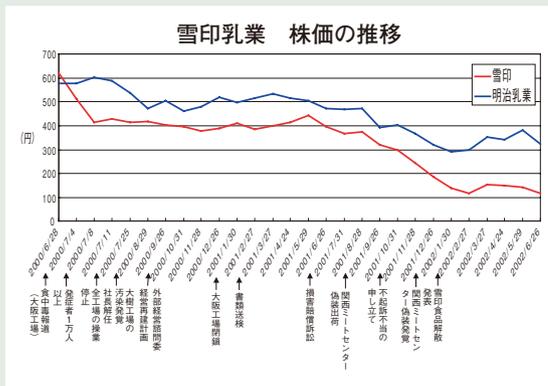
1. オリエンテーション：大学と産学連携  
大学教員はどこまで産学連携に携わることができるか
2. 企業の社会的責任：事例 雪印中毒事件  
対応の迅速さと社内体制
3. 製造物責任：事例 シリコン豊胸材  
科学的真実ではなくても、企業ダメージをこうむることがある
4. 研究者倫理と技術者倫理：データの信頼性  
研究者と技術者はどこが異なるか
5. 現在のバイオテクノロジー技術（動物）
6. 生殖補助医療：事例 代理母出産  
子供を持ちたいという親の欲望にどこまで答えるべきか
7. 遺伝子診断：事例 先天性遺伝病  
親の選択と責任はどこまで認められるか
8. 安楽死と臓器移植：事例 小児への臓器移植  
臓器ドナーとして小児を認めるか
9. 現在のバイオテクノロジー技術（植物・環境）
10. 遺伝子組換え作物：現状と生産者メリット  
遺伝子組換え作物は世界中で広まっている
11. 食の安全性：事例 日本のコメは安全か？  
食品の安全性はどのように議論されているのか
12. 環境安全性：事例 どの生態系を保全するのか？  
人間社会にマイナスの生態系も保全する必要があるか
13. バイオテクノロジーに関する南北問題：事例 医薬品と特許料  
抗エイズ薬は途上国に特許料抜きで提供すべきか
14. バイオテクノロジーに関する南北問題：事例 天然資源と利益配分  
天然資源や伝統的知識の価値はどのように決められるべきか
15. アニマルライツと国際NGOによる違法行為  
NGOが言っていること、やっていることは犯罪であるケースもある

### 採点基準

毎回、出席確認を兼ねて、簡単な課題を出す。次回講義の際に提出。出席点（4点×15）、課題答案（4点×15）。最後にレポートを提出（レポート課題：講義中のテーマについて、自分で調べたこと）（30点）。100点以上打ち切り。

賛成・反対の意見があり、それを紹介するに当たって、具体的事例を述べることに心がけた。

例えば、第2回目の「企業の社会的責任」で



は雪印乳業の食中毒事件を取り上げた。平成12年の食中毒事件と対応のまずさはよく知られているが、昭和30年の食中毒事件では迅速な対応を行った結果、企業ダメージは少なかった。この2回の事例を対照させて、企業内コンプライアンス体制の重要性を述べた。

また、ダイズイソフラボンについては、女性ホルモン類似活性が若返りに効くと言われているが、ヒトの乳がん細胞の増殖を促進すること（この活性が女性ホルモン類似活性である）やホルモンバランスが崩れる可能性が示唆されている。こうしたことから、イソフラボン強化味噌や納豆がまだ認可されていないということ、食品安全委員会の議事録やパブリックコメント等を引用して説明した。

更に、国際NGOの活動が一方的な視点によるものであり、絶対に正しいというものではないことを、抗エイズ薬の特許権に関する問題やアニマルライツ等による違法行為・企業に対する嫌がらせ行為等を紹介して、説明を行なった。

各講義終了後、具体的事例（想定事例を含む）

を課題として出し、受講生自身が考えて、次回、回答を提出するようにした。これは、出席を取るとともに、1回でも考えてもらいたいという意向によるものである。

### 3、その他、工夫した点および受講生の評価

講義資料（パワーポイント）は授業終了後、所属部局のウェブサイトで公開した。受講生にも好評であったことから、現在、NPOバイオものづくり中部のHPに移行して公表している（www.bioface.or.jp）。

受講届を提出した88名のうち、全部出席したものが過半数（48名）。補講を2回、土曜日に実施したが、その分を除くと、63名が全部出席。出席率はよいと思われる。また、通常、授業開始時に40名程度が出席していた。少なくとも、過半数の受講生の支持は得られたと考えている。また、受講生アンケートからは、メディア等の情報を鵜呑みにせず、自分で考えることが重要であると理解したという回答が多く、講義目標はかなり達成されたと考えている。

人数が多かったため、各回の課題を添削・分析して返却することは出来なかった。双方向性を意識した講義を行うためには、もう少し人数が少ない方がやりやすい。また、講義準備にはかなり時間を割き、結果として受講生から好評を博したが、部局等における評価にはほとんど還元されていない。この点の改善を期待したい。

昭和54年3月東京大学大学院理学系研究科博士課程（生物学専攻）満了、理学博士。  
カリフォルニア大学サンディエゴ校を経て、名古屋大学農学部付属生化学制御研究施設助手に着任。生物分子応答研究センターを経て、農学国際教育協力研究センター助教授。  
名古屋大学産官学連携推進本部委員およびNPOバイオものづくり中部理事・事務局長として、東海地域のバイオ産業振興のための産学連携に力を注いでいる。  
専門分野：分子遺伝学、産学連携、国際協力  
趣 味：読書、酒、中将棋

たけだ ゆたか



中島 葉子  
 大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士課程後期課程3年

## 外国籍の子どもたちとの関わりの中で訪れた転換



教室での学習風景

2001年6月から、私は愛知県豊田市で活動するNPO法人子どもの国にスタッフとして参加している。保見団地は外国籍の人々が多く暮らす集住地区であり、子どもの国は外国籍児童生徒を対象に、団地内で放課後学習支援事業「ゆめの木教室」を開いている。

ゆめの木の子どもたちとの出会いは、ひょんなことから始まった。学会で知り合った先生に行ってもらいたい所があると言われ、そこがどんな所かよく把握しないまま気がついたら子どもたちに囲まれていた。子どもたちは人見知りなどせず、どんどん話しかけてくる。圧倒されて余裕がないのは私の方だった。

ゆめの木に来ている多くの子どもは、日本語での日常会話に不自由しない。勉強はきらいで元気よく走り回り、屈託のない笑顔を見せる。私は元気な子どもたちにいつの間にか惹かれていった。

しかし、元気よさに圧倒されつつ楽しく過ごす時間の中だけに、子どもたちは私を留めてはくれなかった。子どもたちは全て「体当たり」である。喜怒哀楽全て。子どもたちが言葉で態度でぶつけてくるものを、私はときに持て余し、戸惑い、混乱した。そんな私に構わず、子どもたちは次々と体当たりしてくる。

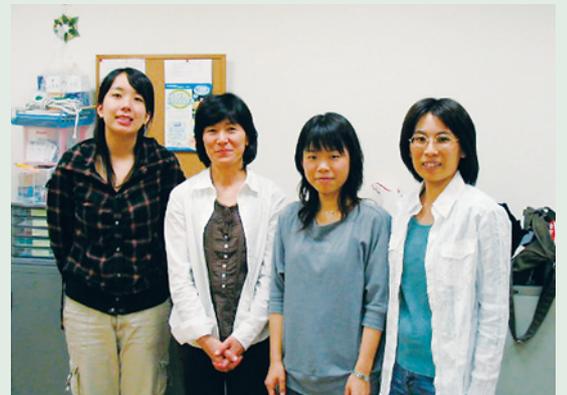
日々の活動の中で子どもたちの体当たり揉まれているうちに、少しずつ何かが見えてきた。子どもたちの体当たりの奥にあるものは何なのか。外国籍であるがゆえに生じる問題とは、いったい何なのか。子どもたちの表情や言葉の向こう側にあるものに手を伸ばしたい、と思うようになった。そのためにはただ受け止めるだけでは足りなかつ

た。私もまた、自分の感情とともに子どもたちとぶつかることが必要なのだ。それは「子どもたちの問題」から「私の問題」への転換だった。

私は大学院で外国籍児童生徒の教育問題を研究し、研究者として何ができるかという問題を抱えている。同時に、現場で私がこの子どもたちに今何ができるのかという問題も抱える。前者は問題から距離をとって客観的に眺める作業が必要であり、後者は問題に埋没して向き合う作業が必要だ。この矛盾するような二つの問題を、私はもはや切り離すことができない。あえて切り離さないことで、新しい何かを見つけ出したいと思っている。

NPO 法人子どもの国

公式サイト <http://www.kodomonokuni-aichi.org/>  
 メールアドレス [kodomonokuni1999@yahoo.co.jp](mailto:kodomonokuni1999@yahoo.co.jp)



ゆめの木教室スタッフ（右端が筆者）

なかしま ようこ  
 1976年9月16日生まれ  
 愛知県出身

## 日独共同大学院 — 化学教育研究におけるミュンスター大学と名古屋大学の連携 —

物質科学国際研究センター長  
巽 和行

名古屋大学大学院理学研究科物質理学専攻および物質科学国際研究センターは、大学院後期課程における教育研究を協力して行うべく、本年度からドイツのミュンスター大学化学薬学系大学院と新たな共同大学院プロジェクトを開始しました。従来型の短期派遣留学制度にはない、新たな包括的教育連携体制を確立して、両大学院専攻の教育研究を国際化することを目的としており、名古屋大学は日本学術振興会（JSPS）から新パイロットプログラム「日独共同大学院 (Japanese-German Graduate Externship)」として、ミュンスター大学はドイツ研究協会（DFG）のプログラム「International Research Training Group」として支援を受けます。

交流相手となるミュンスター大学は、ドイツで3番目に大きな大学であり、現在約39,000人の学生が履修登録し、毎年約5,000人の学生が卒業しています。同大学は120以上の広域にわたる研究分野を構え、多くの部局ですばらしい研究成果を挙げています。また同大学は国際的な側面も持ち、3,500人以上の留学生在が学んでおり、世界中で400以上の研究機関と交流協定を結んでいます。

新プログラムでは、双方の大学院後期課程の学

生を相手方大学院に数ヶ月間配属させ、博士論文の作成を協力して行うことを最大の特徴としています。交換大学院生は、所属する大学に提出する博士論文の一部に、派遣先の大学で指導を受けた研究活動の成果を加えることが求められます。さらに、相手国の学会発表、投稿論文の作成、セミナーの共同企画に積極的に参加する予定です。名古屋大学は、若手教員が共同教育研究活動に携わることによって、国際的な教育者として成長することも期待しています。

日独両国において、人材育成は科学技術政策の基幹をなす重要課題です。特に、大学院教育に課せられた責務は重く、高度で深い科学技術の基礎知識を教えるとともに国際的に活躍できる若手人材を養成することが強く求められています。特に、大学院生が初期の段階から国際的な環境下で教育を受け、自らが積極的に海外へ飛躍するための素地を養うことは両国の将来にとって極めて重要です。その先導役を、物質創造研究のCOE（中核的研究拠点）として認知されている名古屋大学とミュンスター大学が受け持つことに、我々は誇りと使命を感じています。



ミュンスター大学ホームページ (<http://www.uni-muenster.de/Chemie.oc/IRTG/index.htm>) より

## 国家公務員から大学職員へ

## 1. はじめに

筆者が国家公務員試験に合格して国立大学に採用された時の誓約書は、「国民全体の奉仕者」「日本国憲法を遵守」「法令及び職務上の命令」「不偏不党」「公正」の言葉がちりばめられたものであった。現在は、「名古屋大学職員の職務上の責任」「規則を誠実に遵守」「公正に遂行」の言葉が入った誓約書であり、法人化後は、国民全体の奉仕者ではなく、当該大学職員としての誓約となっている。

## 2. 行政機関の末端としての国家公務員から大学職員へ

文部事務官として、主に国立大学の総務・人事系の職場で働いてきたため、人事院規則と国家公務員法は職務上の必需品であった。学生と接触する機会が少ないこともあって、意識としては大学職員よりも国家公務員の方がより強かった。

平成16年4月から国立大学法人の職員は非公務員となったが、この時期に他大学に異動する私は、法人化の前日に文部科学大臣宛の辞職願いを書いたものである。

法人化後の大学職員は、日本の高等教育の発展を志向するのではなく、自己の属する大学の発展充実に尽力する必要にせまられている。特に、近年、他大学との差別化、個性化、競争的資金の獲得等が叫ばれており、我が名古屋大学の教育活動の活性化、学生支援策の充実発展に、我々事務職員は何をなすべきかが問われている。

## 3. グラウンドキーパーから車の両輪へ

大学を構成するのは教員と学生の二者で、事務職員はその教育環境を整える仕事をしているグラウンドキーパーであり、従って、事務職員は良好なグラウンドを整備するために全力を尽くしていればいと従来は考えられていた。しかし最近では、「車の両輪論」が一般的になってきた。それは、教員と事務職員の役割は異なるが、教育・研究を担当する教員と、管理・運営を担当する事務職員が大学を支えているのであって、教育・研究は教員の主導で行われ、教育・研究と直接関連しない人事や財務は事務職員主導で行われ、共に車の両輪として大学を支えているという考え方である。

この「車の両輪論」は、教員と事務職員が対等の立場であると主張するものであるが、実際は、教育・研究の支援活動を行っている学務の業務を教員の下請け業務とみなし、予算や定員を文部科学省と折衝して獲得してくるのが優秀な大学事務職員であるとして、学務系の事務を軽視する傾向があった。

## 4. 教職協働の担い手としての事務職員

新しい国立大学法人像においては、「法令に基づく行政事務処理や教員の教育研究活動の支援事務を中心とする機能を越えて、教員組織と連携協力しつつ大学運営の企画立案に積極的に参画し、学長以下の役員を直接支える大学運営の専門職能集団としての機能を発揮する…」とされ、いわゆる広中レポートでは、「正課教育及び正課外教育における学生の人間的な成長を図り、自立を促すための指導は、教員の基本的責任であるが、事務職員についても、学生に対して助言したり、教員に対して提言や発言ができるよう専門的能力を育成する必要がある。」としている。

法人化後の大学は、さまざまな業務分野において大学運営の専門職能集団としての職員の活躍が期待されているが、とりわけ学務系職員には、時代の変化が激しい今日の「大学教学」の専門家として、自分の属する大学教育の現状を分析し、教育改革を企画立案できる能力が求められている。

今こそ学務系職員は、教育の分野で教員と協働し、名古屋大学の教育活動の充実発展、学生支援等の教育業務を担うスペシャリストとして、名乗りをあげようではありませんか。



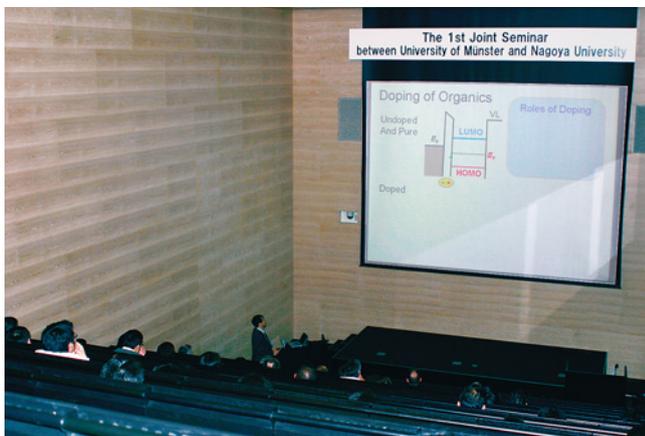
職場にて

## 第1回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーを開催

●大学院理学研究科・物質科学国際研究センター

第1回ミュンスター大学・名古屋大学共同セミナーが、11月10日（木）、野依記念物質科学研究館において開催されました。

このセミナーは、日本学術振興会のパイロットプロジェクトとして新たに採択された「日独共同大学院（Japanese-German Graduate Externship）」を開始するに当たり、ミュ



セミナーの様子

ンスター大学化学部・薬学部と本学大学院理学研究科物質理学専攻の担当教員の研究内容を相互に紹介し、共同教育研究プロジェクト推進の打ち合わせを行うために企画されたもので、同専攻の教員・学生約80名の参加がありました。

セミナーでは、同プロジェクトのドイツ側コーディネーターであるエルカー・ミュンスター大学教授による開会あいさつとプロジェクトの概要説明の後、ミュンスター大学8名と本学7名の教員が、各研究室の先導的研究内容の概略と共同大学院構想への取り組みについて交互に報告し、活発な討論が行われました。続いて、随行したドイツ研究協会のプロジェクト担当責任者から、「International Research Training Group」プログラムを中心としたドイツの大学間・産学連携研究に対する支援体制について説明があり、本学側コーディネーターである異物質科学国際研究センター長による閉会のあいさつで幕を閉じました。

今回のセミナーにより、日独双方の教員間の連携が深められるとともに、ドイツ側教員と本学の大学院学生との交流が図られ、大学院学生がドイツへ派遣される際の相手側担当教員を決めるきっかけになることが期待されます。

なお、「日独共同大学院」の詳細については、本誌21ページ「世界につながる」をご覧ください。

## 日独ワークショップ「バイオニクスと自然に学ぶ技術」を開催

●大学院工学研究科

日独ワークショップ「バイオニクスと自然に学ぶ技術」（主催：大学院工学研究科、ワークショップ組織委員会）が、10月1日（土）、2日（日）の2日間、野依記念学術交流館において、「日本におけるドイツ年」の行事として開催されました。

ワークショップには、日本から47名、ドイツから30名の計77名の参加があり、開会にあたり、組織委員会を代表し



ワークショップの様子

て、松崎雄嗣名誉教授、Cameron Tropea ダルムシュタット技術大学教授及び細江繁幸工学研究科教授からあいさつがあった後、5件の基調講演を含む33件の講演が行われました。従来の技術が環境の汚染・破壊、資源の枯渇等をもたらしたことに對する反省から、自然の営みに学んで、循環型の技術の創出・確立を目指すための研究が、流体、構造、材料プロセス、建築、ロボット、昆虫、植物、バイオメディカル、知能、神経等の幅広い分野から発表され、活発な議論が展開されました。特に、このワークショップの開催によって得られた成果を発展させるために、今後の研究協力や共同研究を進めるための討論の時間を設け、率直な意見が交わされました。

初日のワークショップ終了後に行われた交流会では、山本理事、澤木工学研究科長の歓迎の辞に続き、ドイツ大使館参事官、連邦共和国科学技術省等からのあいさつや来年以降の研究計画等の説明が行われました。なお、会期中には、本学21世紀COEプログラム「自然に学ぶ材料プロセスの創成」（拠点リーダー：浅井滋生工学研究科教授）とダルムシュタット技術大学の間で交流協定が締結されました。

# テクノ・フェア名大‘2005’を開催

－創造に会う。未来に触れる。－

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、11月11日（金）、IB 電子情報館において、大学院環境学研究科、大学院情報科学研究科及びエコトピア科学研究所の共催を得て、「テクノ・フェア名大‘2005’－創造に会う。未来に触れる。－」を開催しました。

これは、大学にある技術シーズの展示、研究室公開や講演会等を通じ、大学の研究成果を広く公開し、新規産業の創出や既存産業の技術の高度化を推進する機会を設け、より一層の産学官連携及び地域産業界の更なる発展を目指していくことを目的として、平成11年から開催されているもので、6回目となる今回は、中部経済産業局、愛知県や中部地区の企業の研究開発担当者等約950名に加え、本学関係職員約250名の来場がありました。

午前中に行われた講演会では、今回初めて他研究科に講演を依頼し、上田 実医学系研究科教授が、「再生医療の実用化と産学連携」と題して、医工連携に関する最先端研究や医療技術開発についてわかりやすく講演しました。続いて、菅井秀郎工学研究科教授による「プラズマによる新



研究シーズ展示

しいモノづくり」、武田邦彦工学研究科教授による「材料劣化と製品の信頼性－産に対する学の貢献の一つの形として－」と題する講演が行われ、約300名の参加者は、メモをとりながら熱心に聞いていました。また、展示会場にも、企業の研究開発担当者等が多数訪れ、ブースの担当者から研究成果等の説明を受けるとともに、実用化に向けての相談や活発な意見交換が行われるなど、企業側が同フェアによる産学官連携に高い関心と大きな期待を寄せていることを伺わせました。

午後からは、前回の来場者に対し事前に行ったアンケートで特に要望の多かった4名の教員による展示されている研究内容の概要説明が行われました。この講演にも100名以上の来場があり、臨時に席を設けましたが、それでも立ち見が出るほどの盛況となりました。また、研究室見学では、100名以上の方から申し込みがあり、大学院学生や教員の説明を熱心に聞く参加者の姿が多くの研究室で見られました。

今年度も、具体的に共同研究へ向けて動き出した研究室が数多く見受けられるなど、成果も年々目に見えて挙がってきていることから、同研究科及び関連研究科・研究所では、より一層産学官連携を推進していくことにしています。



展示研究内容概要説明（ミニ講演）

## 故長澤瑞穂君を送る会を開催

●医学部

故長澤瑞穂君を送る会が、11月9日（水）、医学部において開催されました。

長澤君は、大学卒業後、突然病魔に襲われたのを機に、自分と同じように病で苦しむ人を救うため、医学者になることを決心し、平成12年4月、本学医学部に入学しました。医学生として熱心に勉学に打ち込む傍ら、附属病院で患者として治療を続けましたが、6年間に及ぶ闘病生活の末、今年4月、志半ばで帰らぬ人となりました。

長澤君の医学に対する姿勢や生き方に共感した学生をはじめ、治療や教育等を通じて交流のあった教職員の希望が叶い、11月に長澤君の好きだった「しだれ桜」が植樹され、その傍には、「今を生きる」と刻まれた石碑が建てられました。



植樹されたしだれ桜とともに

## 医学部解剖弔慰祭を挙行

医学部解剖弔慰祭が、10月20日（木）、挙行されました。

この弔慰祭は、医学の教育研究のために献体された故人を慰霊するため、毎年行われているもので、今年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約400名が参列し、故人のご冥福をお祈りしました。

式典では、高橋雅英医学部長代理から、「御提供いただいた御遺体に深く感謝するとともに、医学医療の進歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する覚悟である。」と慰霊のことばが述べられました。また、学生を代表して、渡辺紀博君が、感謝のことばを述べるとともに、明日の医学医療を支える者として努力を怠らないことを御霊と御遺族に対して誓いました。式典終了後には、解

剖供養塔に御遺族、教職員、学生がお参りました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖38体、病理解剖50体で、医学部創設以来の献体総数は16,788体となりました。



解剖弔慰祭の様子

## 医学部保健学科が市民公開講座を開催



公開講座の様子

医学部保健学科は、10月16日（日）、保健学科本館大講義室において、「あなたはがんについてどこまで知っていますか」をテーマに、平成17年度市民公開講座を開催しました。

近年受講生が減少傾向にあったため、今年度から1日のみとし、また、受講料を無料にするとともに、社会の関心の高い「がん」をテーマに選んだところ、定員100名に対し125名の応募があり、当日は10代から70代までの幅広い年齢層から94名が受講しました。

講座では、池田 充医学部保健学科助教授による「がん早期発見のための最新画像診断機器」、市原正智同助教授による「がんになるメカニズム」、横井豊治同助教授による「顕微鏡でがんを診断する」及び神里みどり同助教授による「がんと共に生きる」と題する講義が行われ、がんについての各々の専門性を生かした様々な切り口の講義は大変好評でした。

## 農業教育公園・講演会(第2回)を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



大澤教授の講演を熱心に聞く参加者

今年度の地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会の第2回が、10月15日(土)、大学院生命農学研究科附属農場内の農業館において開催され、大澤俊彦生命農学研究科教授が「健康と食生活」と題して講演しました。

講演で、大澤教授は、現在の日本で3人に1人が亡くなっているガンの予防にどのような食品が効果的かを科学的に調べた「デザイナーフーズ・プログラム」について紹介し、ガンを予防するためには食生活を見直すこと、特に野菜や果物を積極的に取ることを強調しました。具体的には、1日に400gの野菜や果物と80gの良質な赤肉を摂取し、動物性脂肪を取りすぎず、塩分は1日6g以下にすることが重要であるとアドバイスしました。また、ガン予防に効果のある食品も、それだけを単独で過剰摂取するのではなく、1日に数種類の食品を適度に毎日摂取することが大切であるとアドバイスし、参加者は熱心に聞き入っていました。

## 真鍋淑郎先生特別講演会を開催

本学21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」は、11月14日(月)、シンポジオンホールにおいて、地球温暖化研究で世界をリードするプリンストン大学の真鍋淑郎先生の特別講演会を開催しました。

真鍋氏は、「地球温暖化に伴う水資源変化の予測」と題して、グローバルな視点に立ち、数値モデルを用いながら、今後の水資源量の変化について講演し、200名の参加者は同氏の最新の研究成果に真剣に聞き入っていました。現在、既に水資源が豊富な地域では、さらに水が豊富になり、洪水の危険が増す一方で、水が不足している半乾燥地域では、さらに乾燥が深刻になり、植物の生育に影響を与えると予測し、今後、洪水や渇水対策など、水管理の重要性がさら

に高まると話しました。

特別講演会に引き続き、国際シンポジウム「氷河期の中の『地球温暖化』を考える」が2日間にわたって開催され、真鍋氏と COE 関係者を含む80名の研究者が意見交換を行いました。



講演する真鍋氏

## アジア学術セミナー「プレート沈み込み帯における巨大地震」を開催

●大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センター

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターは、9月27日(火)から10月4日(火)まで、日本学術振興会と共催で、本学を中心に、アジア学術セミナー「プレート沈み込み帯における巨大地震」を開催しました。

セミナーには、講師17名(外国から7名)、受講生39名(外国から27名)が参加し、講義(4日間)、紀伊半島への津波防災見学ツアー(2日間)、気象庁や国土地理院等の見学(2日間)が実施されました。

講義では、最近のスマトラ地震等のプレート沈み込み帯で発生する巨大地震のメカニズムについて、カナダ、カムチャッカ、日本、インドネシア等の観測事例やモデルシミュレーションなどで得られた研究成果をレビューすると

もに、地震被害の社会学的考察等も行われました。受講生も活発に質疑し、講師もこれに丁寧に応じていました。

また、津波防災見学ツアーでは、「稲むらの火」のモデル地である和歌山県広川町を訪れ、同町出身の地震学者・津村建四朗さんから詳しい説明を受けました。そこで、「稲むらの火」を受講生が地元で語る言語に翻訳することが約束され、セミナーを終えて1か月足らずで、すでにフィリピン、インドネシア、ロシア、中国、そして南スラベシ、ミンダナオという地方の言葉にまで翻訳される(詳細は、<http://members8.tsukaeru.net/kimata/inamura.htm>)など、今後の学術交流の礎の役目を果たしたセミナーとなりました。

\*「稲むらの火」……1854年の安政南海地震による大津波が広村(現在の広川町)を襲った際、村の郷土・浜口梧陵が、収穫したばかりの大切な稲むらに火を放ち、暗闇の中で逃げ遅れていた村人を救った物語で、昭和12年から10年間にわたり小学国語読本に掲載された。

## 国際開発研究科が国内実地研修現地報告会を開催

大学院国際開発研究科は、10月31日（月）、長野県下伊那郡泰阜村において、国内実地研修現地報告会を開催しました。

この報告会は、同研究科が平成7年度より実践教育プログラムの一環として、日本人学生と留学生が共同作業を通して国内の地域開発の現場を知り、開発の諸問題を学ぶこと等を目的に実施している「国内実地研修」で学んだことについて、地域住民と意見交換をするために開催されてい



発表をする大学院学生

るものです。

今回は、10月12日（水）から14日（金）まで実施された泰阜村での実地研修を踏まえたもので、松島貞治村長、村役場の職員をはじめ多くの村民の方々の出席の下、博士課程前期課程1年生31名（日本人14名、留学生17名）が、現地調査に基づく研究成果の発表や提言を行い、これを受けて、活発な意見交換が行われました。実地研修では、村長、村役場、村内の様々な団体の協力を得て、村内診療所、特別養護老人ホーム、福祉施設、小・中学校、教育委員会、商工会、養殖漁業組合、農業組合等の団体及び村民の方々と面談する機会が得られ、学生たちは、村が抱えている過疎化・高齢化等の問題の深刻さを理解するとともに、村民がこれらの問題にどのように対処しようとしているのかを自らの調査によって確認してきました。

同研究科では、この調査結果を報告書にまとめ、泰阜村の方々や高等研究機関等に配布するとともに、こうした報告会を学生による地域貢献のあり方の一つとして今後も強化していく予定です。なお、同研修の詳細については、<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/project/fieldwork/Dfw/index-j.htm> をご覧下さい。

## セミナー「グローバルに仕事をするとは？」を開催

### ●留学生センター

留学生センターは、10月22日（土）、全学同窓会の支援を得て、国際的に仕事をする4名の本学同窓生を講師に迎え、セミナー「グローバルに仕事をするとは？」を開催しました。

セミナーは、様々な国籍の在学生の参加のもと、日本語及び英語で進められ、タイの多国籍企業に勤務する



セミナーの様子

プラワット ピエンチャルーンさん（1991年大学院工学研究科修了）、名古屋の商社に勤務する齋藤イヴォナさん（1998年日本語・日本文化研修コース修了）、ベトナムと日本の研修交流に携わるチャン アイン チュンさん（2000年同コース修了）、東京のコンサルタント会社に勤務するガストン ヨシムラさん（2005年大学院経済学研究科修了）が、各々の立場から、世界の人々と連携して仕事をするために必要な知識、技能及び人間性について話し、学生時代に五感を駆使してあらゆることを実体験すること、経済格差や民族差別など厳しい現実と直面する中で、出会いを大切に目標に向かって進むことなどのメッセージを伝えました。後半は、パネリストを囲んでのグループ討論が行われ、最後に、学生相談総合センター就職相談部門から、今後の就職活動の進め方についてアドバイスがありました。参加者からは、「同窓生の生の声を聞くことで就職が身近に感じられた」、「国籍の壁を常に感じている自分にとっては賛成できない論点もあったが、それも含めてグローバルに仕事をするということについて考えるよい機会となった」等の意見が出されるなど、学生が将来像を描き、世界で活躍するための準備をしていく貴重な機会となりました。

## 附属図書館が2005年秋季特別展を開催 知の万華鏡－書物からみた18世紀の西洋と東洋－

附属図書館及び附属図書館研究開発室は、10月21日（金）から11月11日（金）まで、大学院経済学研究科、大学院文学研究科及び日本18世紀学会と共催で、2005年秋季特別展「知の万華鏡－書物からみた18世紀の西洋と東洋－」を開催しました。

18世紀は、ヨーロッパでは「啓蒙の時代」と呼ばれ、近代的知性の原型が形作られた時代として知られています。また、出版文化が開花したこの時代は、情報化や科学の普及による知識の転換期であり、同時代の東洋との意外な共通性のみならず、インターネット時代の現代とも通じる性格を持っていたことが注目されています。

今回の特別展は、こうした動向も踏まえながら、西洋と併せ、東洋も視野に入れることで、18世紀東西の知識世界の動きを総合的に捉える契機となればと企画されたものです。同館には、ホップズ・コレクションなど、西洋近代科学黎明期の貴重資料が多数所蔵されており、また、東洋関係でも、神宮皇学館文庫など和漢古典籍の豊富な資料があり、その悉皆調査が進みつつあります。実際の展示は、こ



熱心に鑑賞する参加者（於：中央図書館第一展示室）

うした活動の成果も取り込みながら、40種ほどの資料を用いて、①情報化の幕開け、②未知なるものへの欲望、③新しい科学、④人間の学と古典の成立、⑤本の世界旅行の5部構成としました。

3週間にわたる開催期間中、学内外から700名の入場者があり、配布された図録ガイド（資料解説やコラムからなる80頁の展示図録）を手に取りながら、一冊一抱えもあるフォリオ版（40×25cm）の『百科全書』など、普段は貴重書庫に保存されている書物、第二展示室に設置された18世紀の書物をめぐる疑似体験ができる電子展示や参考資料を熱心に鑑賞する姿が見られました。

特別展に関連して、10月22日（土）には、講演会が開催され、60名を超える参加者は、水田 洋名誉教授（学士院会員）による「本を集めることについて」、逸見龍生新潟大学人文学部助教授による「書物あるいは運動する知のネットワーク－18世紀ヨーロッパ『百科全書』異本刊行史」、井上 進文学研究科教授による「書物の明清交替－17世紀から18世紀へ」と題する講演に聞き入り、書物をめぐる豊かな世界を堪能しました。

また、11月3日（木）の特別展資料講座では、研究開発室員の長尾伸一経済学研究科教授から、展示資料及びその背後にある時代思潮やエピソードを交えた丁寧な解説があり、「展示が深く理解できた」、「参加して良かった」との感想が多く寄せられました。



特別展講演会 講演する水田名誉教授

# 農学国際教育協力研究センターが 日米大学間対話セミナーを開催



参加者による記念撮影

農学国際教育協力研究センター及び米国の Association Liaison Office for University Cooperation in Development (ALO) は、10月31日（月）から11月2日（水）までの3日間、野依記念学术交流館において、文部科学省、外務省、国際協力銀行及び国際農林水産業研究センターの協力を得て、「農学国際協力における日米大学の連携をめざして」をテーマに、日米大学間対話セミナーを開催しました。

このセミナーは、日米の大学・研究機関、援助機関の専門家が開発途上国の生活の最も基本である農業と農学教育を支援するために、連携の可能性と強化について討議するもので、オープニングとクロージングを含む9つのセッションに分けて行われました。

オープニング・セッションでは、本学を代表して、平野総長から歓迎のあいさつがあった後、文部科学省の井上正幸国際統括官、外務省の佐渡島志郎参事官から開催に当たってのあいさつがありました。

続いて、①農学協力に対する取り組みの概要、②研究・技術成果の普及と活用、③農学協力の成果の普及・起業化

に関する討議、④研究・教育を通じた人材育成、⑤大学協力プロジェクトへの資金－援助機関との関係－、⑥日米大学間連携コンセプト討議、⑦災害（戦後）復興人づくり支援の7つのセッションが行われ、農学分野の国際協力に携わる日米各10大学からそれぞれ10名が研究成果及び支援課題等について発表しました。各セッションでは、予定時間を超える活発な討論が行われ、開発途上国の支援課題等について多くの成果が得られました。なお、この成果は、平成18年3月までに同センターと ALO が英文の報告書を作成し、開発途上国を含め関係大学・機関や関係者に配付する予定です。

また、初日のセッション終了後にシンポジオンホールで開催された晩餐会では、海外からの研究者にとっては珍しい和太鼓の演奏による歓迎があり、参加者は日本の伝統文化に暫し耳を傾けていました。



あいさつする（左から）佐渡島外務省経済協力局参事官、井上文部科学省国際統括官、平野総長

## ICCAE 2005年度 第4回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



オープンセミナーの様子

農学国際教育協力研究センターは、11月9日（水）、2005年度第4回オープンセミナーを開催しました。

セミナーでは、国際半乾燥熱帯作物研究所西アフリカ及び中央アフリカ部長（ICRISAT-Niamey）の Dr. Saidou Koala が、西アフリカ半乾燥熱帯の砂質土壌で農業生産を持続するためには化学肥料と植物残渣・家畜糞等の有機物の混合施用が有効であること、化学肥料は作物の株元へのマイクロドーズ施用が省肥的・効率的であることを報告しました。また、バングラデシュ農業研究技術会議の Dr. Nur A. Khondaker は、バングラデシュが抱える農業開発阻害要因及び我が国による農業技術協力や人材育成協力の可能性について報告しました。セミナーには、大学院生命農学研究科の教員や学生、留学生の他、大学院国際開発研究科や情報文化学部等からも参加があり、質疑応答しながら、各地域・国が抱える問題や農業技術のエンドユーザーへの普及の方法等について熱心に討論しました。

## メダカ生物遺伝資源の標準化に関する 国際シンポジウムを開催

●生物機能開発利用研究センター

生物機能開発利用研究センターは、11月13日（日）から16日（水）までの4日間、野依記念学術交流館を主な会場に、日本学術振興会及び文部科学省ナショナルバイオリソースプロジェクト実験動物メダカの支援を得て、メダカ生物遺伝資源の標準化に関する国際シンポジウムを開催しました。

メダカは日本で開発された実験動物で、100年以上前から様々な遺伝資源が収集・開発されていますが、近年は、世界的にメダカを用いた研究が生命科学の様々な分野で急速に増加し、メダカ遺伝資源やその定義、命名法、情報の共有等について世界規模での標準化が必要となっており、この課題の解決に、日本が主導的な役割を担うことが

期待されています。今回のシンポジウムは、この期待に応えるべく開催され、海外7か国（アメリカ、イギリス、韓国、スイス、スペイン、中国、ドイツ）からの18名と国内からの94名の総勢112名の研究者が、熱心に建設的な意見を交わすなど、盛況のうちに終了しました。



開会のあいさつをする小林生物機能開発利用研究センター長

## 愛・地球博ポーランド館の岩塩標本が 博物館に寄贈される



愛・地球博ポーランド館から寄贈された岩塩の前に

愛・地球博ポーランド館に展示してあった大きな岩塩標本3個が10月中旬に博物館に移管され、新着標本コーナーで12月末まで展示されています。

これらの標本は、鈴木年代測定総合研究センター長のもとで、CHIME 年代研究を行っているモニカ・シュチさん（ポーランド科学アカデミー所属）の取り持つ縁で、愛・地球博終了後に博物館に寄贈されたものです。標本は、40～60cmの大きなサイズで、きれいな結晶面が見られるものもあること、岩塩が全く産出しない日本では非常に珍しいことから、来館者の注目を集めています。

10月17日には、ポーランド館館長のイェジー・ジコヴィツキ氏と副館長の松本 明氏が博物館を訪れ、岩塩標本と対面しました。ジコヴィツキ館長は、岩塩標本が1978年にユネスコの世界遺産に登録されたヴェリチカ地下岩塩鉱山から掘り出されたポーランド国民の誇りの品であり、ぜひ日本の子供たちに見てもらいたいと語っていました。

## 博物館が『奈良坂源一郎 蟲魚圖譜』の出版と原画の一般公開を行う



出版された『奈良坂源一郎 蟲魚圖譜』の複製本

博物館は、8月に医学部第一外科同心会と共同で、『奈良坂源一郎 蟲魚圖譜』の複製本を出版するとともに、これを記念して、10月19日（水）から10月28日（金）まで、博物館展示室において、原画の一般公開を行いました。

本学医学部の前身である愛知医学校の教授であった奈良坂源一郎が明治時代に描いた魚や昆虫等の図譜3冊が、今年7月に遺族から博物館に寄贈されました。この複製本は、非常に精緻に描かれたこれらの絵を広く市民に知ってもらうために出版されたもので、これまでタイトルのなかった「蝶やトンボ」、「魚」、「エビやヒトデなど」の3冊を『奈良坂源一郎 蟲魚圖譜』として1冊にまとめ、原寸大でカラー印刷されています。

一般公開に先立ち、10月18日（火）、博物館展示室において、複製本の出版に関する記者発表が行われ、同心会会長の二村雄次医学系研究科教授と西川輝昭博物館教授が、奈良坂源一郎の生涯、原本の寄贈の経緯、複製本の出

版の意義等について解説しました。記者からは、医学者の奈良坂源一郎がこうした絵を描いた理由、絵の美術的・博物学的意義、複製本の配布先や配布方法等に関する質問が多数ありました。西川教授は、質問に答える形で、『蟲魚圖譜』の原画は、奈良坂源一郎が明治中期に名古屋の大須に設立した愛知教育博物館の展示資料の一部として作成した可能性があることを指摘し、現在、これについては調査中であることを明らかにしました。

また、原画の一般公開は、第1回名古屋大学ホームカミングデイにあわせて、新着標本展示「奈良坂源一郎の蟲魚圖譜～明治の博物画～」として行われ、ホームカミングデイ当日の770名ほどを含め、1400名を超える見学者が訪れ、原画の素晴らしさを堪能していました。展示コーナーの一角には、医学部解剖学教室の廊下に置かれていた奈良坂源一郎の胸像も臨時に移設され、明治時代の写真とともに、来館者を楽しませていました。



新着標本コーナーを見学する来館者

## 新任部局長等の紹介

### ●大学院理学研究科長・理学部長



近藤 孝男  
(こんどう たかお)

専門分野：時間生物学、植物生物学

〈略歴〉

昭和53年10月 生物科学総合研究機構助手（基礎生物学研究所）  
 昭和56年4月 岡崎国立共同研究機構助手（基礎生物学研究所）  
 平成7年4月 名古屋大学教授（理学部）  
 平成8年4月 名古屋大学教授（大学院理学研究科）  
 平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員  
 平成16年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長  
 平成18年1月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長（～H20.3.31）

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・大学院文学研究科教授 象と釈迦 偉大なイメージの源	10.16 (日)	中日 (朝刊)
2 東京大学主催の主要大学説明会22日開催 本学など計12校が参加	10.17 (月) 10.18 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
3 中学生・高校生を対象とした「ひらめき☆ときめきサイエンスーようこそ大学の研究室へ」を日本学術振興会との共催で実施 プログラムは、新美倫子・博物館助教授の「ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」と各務秀明・医学部助教授の「体の一部を再生させる新しい医療」	10.17 (月)	中日 (朝刊)
4 小泉首相の靖国神社参拝：浦部法穂・法学研究科教授コメント「9月に大阪高裁で違憲判決が出たばかりなのに、参拝を強行するというのは、司法判断を軽視している」	10.17 (月)	朝日 (夕刊)
5 総合運動場に人工芝導入 平野真一総長は、「これまで以上に練習できるようになったので、体育会の選手たちは、良い成果を出してほしい」と話す	10.18 (火) 10.29 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
6 名古屋大学ホームカミングデイを23日に東山キャンパスで開催 豊田講堂で、齋藤明彦・トヨタ自動車相談役が「F1の楽しみ方」と題して講演する他、全9学部がそれぞれ講演会や研究室の見学会を行う	10.18 (火)	中日 (朝刊)
7 サロン：太田美智男・医学系研究科教授 ピロリ菌発見という泥臭い細菌学研究に光	10.18 (火)	中日 (夕刊)
8 学校と安全：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授 事故の防止へ法・条例の整備を	10.19 (水)	朝日 (夕刊)
9 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授に聞く：環境変化への本学の対応の一つとして、世界、特にアジアからの優れた学生を集めることが必要	10.20 (木)	日経 (朝刊)
10 医学部解剖学教室の基礎を築いた解剖学者・奈良坂源一郎が虫や魚の生態を描いた図譜3冊を、医学部第1外科の同門会組織「同心会」と博物館が共同で、『奈良坂源一郎 虫魚図譜』として出版 同心会会長・二村雄次・医学系研究科教授は、「解剖学者ならではの観察眼で、魚の歯まで写実的に描写している。図譜は名大の宝になる」と話し、西川輝昭・博物館教授は、「毛筆での細微な描写が見事で、多くの人に見てもらいたい」と話す	10.20 (木) 10.25 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
11 国家戦略を考える：川瀬晃道・工学研究科教授らが開発中の「テラヘルツ波」を利用する薬物検査装置は「偶然的産物」であり、川瀬教授は、「研究を世の中に役立てるため、企業と大学が触れ合う場がもっと必要ではないか」と提案する	10.20 (木)	読売
12 病気や災害などで親を亡くした遺児へ奨学金を貸与しているあしなが育英会の募金活動「第71回あしなが学生募金」が22日から全国一斉に開始 事務局長・野崎俊平さん・本学学生は「多くの遺児たちの進学をかなえるために、ぜひ協力を」と呼びかける	10.20 (木)	中日 (朝刊)
13 公開シンポジウム「なごやの防災を考える」22日開催 福和伸夫・環境学研究科教授らのパネルディスカッションなど	10.20 (木)	中日 (朝刊)
14 UFJ 総合研究所と共同で医学部や工学部が中心となって予防医学などの研究を進める新組織「ライフトピア機構(仮称)」の素案づくりに着手	10.21 (金)	日経 (朝刊)
15 高田広章・情報科学研究科教授らは、ヴィッツ、サニー技研と共同で、リアルタイム OS を次世代車載ネットワーク「FlexRay」に対応させるための拡張機能やミドルウェアを開発	10.21 (金)	日刊工業
16 総合科学技術会議による国立大学などの科学技術関係活動評価：女性研究者への配慮として、本学の保育施設の支援が挙げられた	10.21 (金)	日刊工業
17 教育学部附属中学・高校は、11月5日に来年度の入学希望者・保護者を対象に学校説明会を開催	10.21 (金)	読売
18 「第16回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい in 愛知」22、23日に開催 愛知憲法会議事務局長・本秀紀・法学研究科教授らが話す	10.21 (金)	朝日 (朝刊)
19 大学院理学研究科教授会は、大峯巖・理学研究科長・理学部長の任期満了に伴い、後任に近藤孝男・理学研究科教授を選出	10.22 (土)	中日 (朝刊) 他2社
20 愛知県と名古屋市による戦争資料館の建設が宙に浮く中、計画が進まない現状を知った愛知県津島市の女性による1億円の寄付を受け、NPO法人「平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会」(理事長・森島昭夫・本学名誉教授)が独自の資料館建設に乗り出す	10.22 (土)	朝日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
21 「第71回あしなが学生募金」が22日から始まる 愛・地球博をきっかけに JR名古屋駅では駅構内の募金活動がで きなくなっており、学生募金事務局次長東海担当の野崎俊平さん・本学学生は、「栄、金山総合駅と並ぶ東海地方 三大拠点の一つだけに、大変な痛手」と話す	10.22 (土)	中日 (朝刊) 読売
22 窓：23日に卒業生や在校生の保護者などの関係者をキャンパスに招き、「名古屋大学ホームカミングデー」を開催 約2000人が来校	10.24 (月)	日経 (朝刊)
23 矢作建設工業と名古屋工業大学などが共同で建物の耐震・制震技術に関する「地震工学技術プロジェクト」に着手 勅使川原正臣・環境学研究所教授らも参加	10.25 (火) 11. 1 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
24 あいち健康長寿産業クラスター推進協議会は24日に設立総会を開き、会長に大島伸一・国立長寿医療センター総長、 副会長に科学技術交流財団理事長・松尾稔・本学名誉教授を選出	10.25 (火)	日経 (朝刊)
25 留学生センターでワークショップ「グローバルに仕事をするとは？」が開催され、日本人学生と留学生約30人が参加	10.25 (火)	中日 (朝刊)
26 「あいち男女共同参画のつどい」26日に開催 男女共同参画室室員・東村博子・生命農学研究所助教授の基調講演 や討論会など	10.25 (火)	中日 (朝刊)
27 附属図書館2005年秋季特別展「知の万華鏡―書物からみた18世紀の西洋と東洋―」11月11日まで開催	10.25 (火)	中日 (朝刊)
28 本学21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」主催の「真鍋淑郎先生特別講演会」11月 14日にシンポジオンホールで開催	10.25 (火)	中日 (夕刊)
29 文部科学省の助成事業「魅力ある大学院教育」イニシアティブに初年度として45大学97件を採択 本学は4件採 択される	10.26 (水)	日経 (朝刊) 他2社
30 2006年1月の大学入試センター試験で初めてICプレーヤーを使った英語のリスニングテストが実施されるのに伴 い、本学で試験監督の責任者らを集めた実施演習が行われた	10.26 (水)	中日 (朝刊)
31 第6回国際研究会集「多重伝達形態論―人間の最も効果的な伝達手段を探る」28日～30日に開催 天野政千代・ 文学研究科教授ら国内外の研究者の報告など	10.26 (水)	朝日 (夕刊)
32 「球脊髄性筋萎縮症」に効果のある薬剤を突き止めたグループの一員として研究にいそむ医学系研究所の和座 雅浩さんは、「早く神経難病の治療法を見つけ、つらい思いをしている患者さんを1人でも多く救いたい」と話す	10.27 (木)	中日 (夕刊)
33 参加者らが手作りの器材で水の浸透度を測定する「森の健康診断」が29日に庄内川の水源地で実施 一般の人にも わかりやすく観測できるように考えられた診断方法について、服部重明・生命農学研究所教授は、「落ち葉のた まり方などがうかがえ、土壌の様子を見る一つの尺度になる」と話す	10.28 (金)	朝日 (朝刊)
34 杉浦康夫・本学理事らの呼びかけで昨秋結成された全国組織「九条の会・医療者の会 (略称)」を母体に、医師、 歯科医の立場から憲法9条改正に反対する「あいち医師・歯科医師九条の会」が27日に発足	10.28 (金)	毎日 (朝刊)
35 「消された校舎―旭丘高校校舎建て替えてんまつ記」の出版記念パーティに、編集に携わった旭丘高校校舎の再生 を考える会会長・西澤泰彦・環境学研究所助教授らが参加	10.28 (金)	中日 (朝刊)
36 博物館：名古屋大学博物館 研究成果の一端を、市民や中学、高校生にもわかりやすく伝えたいと創設 「震央情 報表示システム」や「誕生石コーナー」などユニークな展示をしている常設展も魅力	10.28 (金)	読売
37 文化財の地震対策始動：明治村では福和伸夫・環境学研究所教授のチームが微小な地面の揺れで建造物がどのよ うに揺れるかを調査 福和教授は、「明治時代の建物が集中する明治村は、ほぼ同じ条件で観測することができ、近 代建築の耐震性を点検する基礎資料になる」と期待する	10.29 (土)	朝日 (朝刊)
38 芝井広・理学研究科教授と國枝秀世・同教授の2グループは、ブラジルで大型気球に搭載した世界初の宇宙観測用 遠赤外線干渉計望遠鏡と硬エックス線望遠鏡を使い、宇宙観測に乗り出す	10.29 (土)	中日 (朝刊)
39 早期退職優遇制度を導入したことを発表 平野眞一総長は、「制度の導入で世代交代をスムーズに進め、人事の活 性化につなげたい」と話す	10.29 (土)	日経 (朝刊)
40 beword：量的緩和政策 家森信善・経済学研究所教授 難しい解除時期の判断	10.29 (土)	朝日 (朝刊)
41 愛知高速交通の東部丘陵線 (リニモ) の活用策を考えるフォーラムが11月3日に開催 加藤博和・環境学研究所 助教授の講演など	10.29 (土)	朝日 (朝刊)
42 東消防署が、28日に名古屋市東区の消防団や自主防災会の関係者ら約200人を招いて、地震防災講演会を開催 福和伸夫・環境学研究所教授が「東海・東南海地震から命を守る」をテーマに講演	10.29 (土)	中日 (朝刊)
43 インド美術仏教美術研究会 11月5日に文学研究科で開催	10.30 (日)	中日 (朝刊)
44 平成17年度名古屋大学鶴舞公開講座「今が旬、メタボリック症候群でなに？」12月10日開催 井口昭久・医学部 附属病院長らが一般向けにやさしく話す	10.31 (月)	中日 (朝刊)
45 日本エネルギー学会が「第42回石炭科学会議」を開催 森滋勝・先端技術共同研究センター教授らの講演など	10.31 (月)	日刊工業
46 名大サロンの主役：安成哲三・地球水循環研究センター教授 生命は環境と相互作用	11. 1 (火)	中日 (朝刊)
47 万博都市の未来：愛知・上海、深まる交流 本学では11月上海に海外事務所を開設	11. 1 (火)	日経 (朝刊)
48 第7回名古屋大学博物館企画展「トリ 西 鶏―名大のニワトリ学：解剖学図と標本」2日から12月16日まで開催	11. 1 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
49 第2回医用原子力技術研究振興財団講演会「原子力(放射線)利用技術の医療への貢献—そこまで来た次世代がん診断・治療法—」12月9日に豊田講堂で開催	11. 1 (火) 11.15 (火)	日経(夕刊) 中日(朝刊)
50 東海テレビの元ニュースキャスターで、現在、経営企画局次長の磯野正典さんが、国際言語文化研究科「メディアプロフェッショナル論講座」で初となる博士号を取得 仕事をこなしながらの過酷な研究生活に、近藤健二・国際言語文化研究科長は「若い学生もこの姿勢を見習って欲しい」と称賛	11. 2 (水)	中日(夕刊)
51 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 悩みいろいろ「万博効果」	11. 3 (木)	朝日(朝刊)
52 留学生を対象にした「読売新聞特別講座」が2日法学研究科で開催され、読売新聞東京本社運動部の結城和香子次長が、「アジアの五輪運動」をテーマに講義	11. 3 (木)	読売
53 知多半島の産業基盤をクリーンエネルギー社会の構築に活用するために愛知県が知多市や東海市と共同で研究会を設立 愛知県水素エネルギー産業協議会会長・架谷昌信・本学名誉教授を座長に、大学・研究機関、産業界、行政の関係者で構成	11. 3 (木)	中日(朝刊)
54 平成17年秋の叙勲：瑞宝中綬章を長島一男・本学名誉教授、渡邊鑑・本学名誉教授、丹生潔・本学名誉教授、河合望・本学名誉教授、瑞宝単光章を高橋朝代・元医学部附属病院看護部看護師長が受章	11. 3 (木)	中日(朝刊) 他6社
55 吉川典彦・工学研究科教授の研究グループと東邦ガスは共同で、レーザーを用いて炎の中の一酸化窒素濃度を計測する技術を開発	11. 4 (金)	日刊工業
56 科学技術振興機構は、2005年度に創設した革新的原子力システム実現のための「革新技術創出型研究開発」及び「若手対象型研究開発」として、本学の「液化ガスを触媒とする使用済み燃料からのアクチニド抽出法の開発」、「計算科学的手法を駆使した高精度・シームレス物理シミュレータの開発・高速炉ガス巻き込み評価を対象にして」、「材料表面劣化計測技術を用いた耐腐食性高強度材料の研究開発」など37件を採択	11. 4 (金)	日刊工業
57 「テクノ・フェア名大2005」11日に開催 産学官の連携強化を目的に本学の46の研究室が研究成果を公開するとともに、武田邦彦・工学研究科教授ら7人が講演	11. 4 (金) 11. 8 (火) 11.12 (土)	日刊工業 中日(朝刊)
58 松岡信・生物機能開発利用研究センター教授と上口美弥子研究員らは、東京大学などと共同で、ジベレリンに結合して草丈を制御するたんぱく質を発見、「GID1」と命名し、草丈の伸びる仕組みを解明	11. 8 (火)	毎日(朝刊)
59 中部地域の大学が中小企業との連携を強化 本学では、中小企業を主体とする「名古屋大学協定会」を発足し、研究者の取り組みを伝え、新たな協力関係を構築	11. 8 (火)	日経(朝刊)
60 最先端のロボットや精密技術の可能性を探る「第1回次世代ロボットフォーラム」が7日から始まる 市内各地で講演会やシンポジウムなどが開かれ、本学では佐藤一雄・工学研究科教授の講演や名古屋大学「ラボツアー」を開催	11. 8 (火)	中日(朝刊)
61 第3回 ORIUM-COE シンポジウム「物理学の楽しみ—素粒子・宇宙・物質・生命」11、12日開催 三田一郎・理学研究科教授、和田信雄・同教授、神山勉・同教授、田原譲・エコトピア科学研究所教授の講演やパネル展示など	11. 8 (火)	中日(朝刊)
62 愛知建築地震災害軽減システム研究協議会が防災講演会を開催 講演会の他、本学や名古屋工業大学、豊橋技術科学大学の教員と愛知県・名古屋市の職員、建築関係団体の専門家が連携し、住宅・建築地震対策の相談会を行う	11. 8 (火)	読売
63 きらり：教育学部の学生らが運営するボランティアサークル「ちくさ日曜学校」で交流係を務める内海真衣さん・本学学生は、障害者らとの活動を通じ、一緒に楽しむための配慮を学んだと話す	11. 8 (火)	中日(朝刊)
64 なぜ陽子や中性子が生まれながらに自転(スピン)するのかという物理学の大テーマに挑んだ中部大などのグループは、両者を構成する素粒子の一つ「グルーオン」がスピンにほとんど関与していないことを突き止める 研究者の1人、中部大学教授・堀川直顕・本学名誉教授は、「驚きと困惑、衝撃を素粒子物理学者に与えるものだ」と話す 90年代に本学などが参加して行われた実験でも、「クォークが核子スピンの果たす役割は2、3割にすぎない」という結論となり、従来の定説が覆っていた	11. 8 (火)	中日(夕刊)
65 東海地区の大学では情報発信の機能を強化する動きが相次ぐ 本学では広報係が独立、広報室が設けられる 渡辺芳人・広報室長は、「これまで以上に広報し、地域の人たちから信頼される大学になりたい」と話す	11. 9 (水)	読売
66 愛知県は中高年を対象とした起業の支援策として、来年1月、高等技術専門校に起業ノウハウを教える学科を新設し、後房雄・法学研究科教授らを講師として招く	11. 9 (水)	日経(朝刊)
67 訃報：笹津安恕・環境学研究科教授	11. 9 (水)	中日(朝刊) 他2社
68 ドイツ化学産業におけるイノベーション「ELEMENTS OF LIFE」を9日に野依記念学術交流館で開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授の基調講演など	11. 9 (水)	中日(朝刊)
69 2005年度の司法試験の最終合格者1464人が発表される 本学の合格者は32人	11.10 (木)	朝日(朝刊) 日経(朝刊)
70 日本国際博覧会協会は、愛・地球博の余剰金の使い道を検討する「基本理念継承発展検討委員会」を設置すると発表 委員に平野眞一総長、地球環境戦略研究機関理事長・森島昭夫・本学名誉教授ら7人が就任	11.10 (木)	朝日(朝刊)
71 中部の医療 産婦人科医不足：吉川史隆・医学系研究科教授は、教え子の産婦人科医が産婦人科を辞める決断に言葉を失ったが、産婦人科医の激務に対し「好きで入った科でも続けたくなくなるのも無理はない」と話す	11.10 (木)	読売
72 東海地方10月の地震：林能成・災害対策室助手	11.11 (金)	読売

記事	月日	新聞等名
73 本学初の海外事務所を中国上海市に開設 11日の開所式では、平野眞一総長が、「名大に來ている留学生の4割は中国からで、留学生の中核をなしている。事務所が中国との交流をさらに推進していくと考えている」とあいさつ 名古屋大学上海フォーラムも同日開催され、本学 OB の中村利雄・日本国際博覧会協会事務総長が記念講演を行った	11.11 (金) 11.12 (土)	中日 (夕刊) 中日 (朝刊) 読売
74 「名古屋大学古楽研究会定期演奏会～中期・ルネサンス・バロック期の西洋音楽の調べ」 23日開催	11.12 (土)	中日 (朝刊)
75 「三河地震」の被害状況を写した貴重な写真が東京都内に住む元地震研究者の自宅で保管されていることを、林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助手、木村玲欧・同助手らが確認 林助手は、「これまで口頭だけで伝承されてきた話を裏付ける貴重な資料」と話す	11.12 (土)	中日 (夕刊)
76 12日夜、構内で、理学研究科光・赤外線天文学研究室が開発した新型の超軽量望遠鏡の稼働試験が行われた	11.13 (日)	朝日 (朝刊)
77 実験や工作を通じて理科好きの子どもを育てようという催し「リフレッシュ理科教室」がシンポジオンで開催され、赤崎勇・本学特別教授と太田光一・豊田合成常務が講演	11.13 (日)	中日 (朝刊)
78 大災害や事故など万一の時の身元確認に備え、「DNA サンプル」を採取・保管する自治体や企業が出始めた：勝又義直・医学系研究科教授コメント「事業側が、外部への情報漏えいなどのリスクも含めて本人にきちんと説明する必要がある」	11.14 (月)	朝日 (夕刊)
79 愛知県が桃花台線について開業前に立てた需要予測には競合路線の影響が全く想定されていなかったことが、森川高行・環境学研究科教授の調査で判明 森川教授は「考えられない重大な欠陥」と指摘	11.15 (火)	読売
80 きらり：医学部の室内楽サークルに所属する望月朝世さん・本学学生は、「私のフルート演奏が障害児への良い刺激となって欲しい。子どもたちの笑顔によって私も癒される」と話す	11.15 (火)	中日 (朝刊)

## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
<b>1月20日(金)</b> 場 所：環境総合館レクチャーホール 時 間：17時30分～19時  [問い合わせ先] 災害対策室 052-788-6038	<b>第16回名古屋大学防災アカデミー</b> 講 師：島崎邦彦 東京大学地震研究所教授
<b>1月24日(火)</b> 場 所：学生会館 時 間：14時30分～20時  [問い合わせ先] 研究協力・国際部社会連携課 052-789-5545	<b>東京フォーラム2006</b> プログラム ・ブース展示 (14時30分～20時) ・講演会 (16時～) 郷 通子 お茶の水女子大学学長 丹羽宇一郎 伊藤忠商事株式会社取締役会長 ・産学連携交流会 (17時20分～19時) *15時30分より全学同窓会関東支部総会を開催
<b>1月25日(水)～2月26日(日)</b> 場 所：博物館展示室 時 間：10時～16時 休 館 日：月・火曜日 入 場 料：無料  [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	<b>第8回名古屋大学博物館企画展</b> テー マ：版画に込められた民衆の願い～中国伝統年画

名大トピックス No.151 平成17年12月15日発行  
 編集・発行／名古屋大学広報委員会  
 本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。  
 名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)  
**TEL.** 052-789-2016 **FAX.** 052-788-6272 **E-mail** kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
 (<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

### 表紙

グリーンベルト中ほどの  
 ケヤキ越しに豊田講堂  
 をのぞむ  
 (平成17年11月25日撮影)



## 44 愛知医専・愛知病院正門遺構

名古屋大学鶴舞キャンパス（名古屋市昭和区）は現存する本学キャンパスのなかで最も古く、1914（大正3）年に本学医学部の前身校である愛知医専（愛知県立医学専門学校）および愛知病院の移転先として設けられました。以後、鶴舞キャンパスは、県立愛知医科大学（1920～）、官立名古屋医科大学（1931～）、名古屋帝国大学医学部（1939～）、旧制・新制名古屋大学医学部（1947～）の各キャンパスとしての約90年のあゆみをへて現在に至っています。

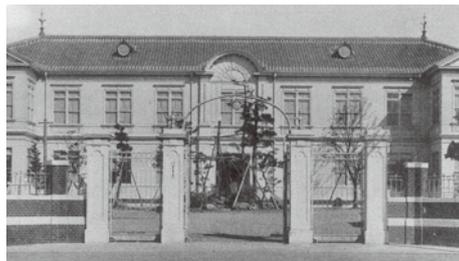
この間、施設の拡充・更新や戦災などによって、鶴舞キャンパス内に戦前の面影を残すものはほとんどなくなっています。しかし、同キャンパス内には、1914年移転当時の愛知医専・愛知病院の門と圍障がそれぞれ遺構として残されており、本学の歴史上も貴重なものとなっています（写真1、2）。

これらの遺構は、本学附属病院病棟の新設工事が1999

（平成11）年に行われた際、本学医学部学友会からの建設寄付によって復元保存のための工事がなされたものです。この工事では、遺構の構造補強をはじめとして洗浄・補修、鉄部など欠損部の新設がなされるとともに、夜間照明装置や銘板の設置も行われました。

遺構の復元保存にあたっては、遺構の沿革調査なども踏まえて本学の施設部および本部施設計画推進室（現・施設管理部および施設計画推進室）において計画案の検討が進められました。遺構は、1930年の愛知医科大学時代における圍障新設・改修工事以降、1941年に戦時下の鉄材供出によって鉄柵・門扉などが外された時期までの形態にほぼ復元されているとのことでした。

なお、この愛知医専・愛知病院正門遺構の沿革や保存経緯の詳細については、本資料室編『名古屋大学史紀要』（第10号、2002年刊）を参照ください。



- |   |   |                            |
|---|---|----------------------------|
| 1 | 2 | 1 愛知医専正門遺構（手前）と名大附属病院病棟（奥） |
|   | 3 | 2 愛知病院正門遺構                 |
|   | 4 | 3 移転当初の愛知医専正門（1914年）       |
|   |   | 4 キャンパスマップ                 |